

同志社大学大学院司法研究科(法科大学院)の現状と課題

—自己点検・評価報告書 2012年4月～2013年3月—

2013年3月

同志社大学大学院司法研究科(法科大学院) 自己点検・評価委員会

はじめに

同志社大学大学院司法研究科（法科大学院）は、2004年の開設以来、21世紀の日本社会・世界において求められる法曹像として、国民一人ひとりの具体的な人生に思いを馳せることのできる想像力・精神・情熱（パッション）と高度の法的専門的知識（リーガルスキル）・国際性とをあわせ持つ法的専門家を念頭に置き、その養成に日々努力を傾注してきた。

本報告書は、2012年度における本法科大学院の歩みを検証し、今後の諸課題を明らかにするためにまとめられたものである。本報告書の策定に際しては、法科大学院制度や法曹制度等に精通した2名の外部評価委員（実務家1名、研究者1名）による厳正な評価を受けている。

同志社大学法科大学院は、2001年の「司法制度改革審議会意見書」が掲げた基本理念に基づき「国民のための司法」を担い得るに足る人材を世に輩出すべく、引き続き自己点検・評価作業を進め、法科大学院教育の質の一層の向上を企図する所存である。

2013年3月

同志社大学大学院司法研究科（法科大学院）

自己点検・評価委員会

目次

第1章 教育の理念及び目標	1
1. カリキュラム	
2. 国際性	
3. 学内諸機関との連携	
4. 入試制度	
5. 入学定員	
6. 改善された点と今後の検討課題	
第2章 教育内容	4
1. カリキュラム改革	
2. 科目群	
3. 修了必要単位数	
4. 改善された点と今後の検討課題	
第3章 教育方法	11
1. 授業のかたち	
2. 授業の方法	
3. 履修科目登録単位数の上限	
4. 改善された点と今後の検討課題	
第4章 成績評価及び修了認定	16
1. 成績評価	
2. 進級制度	
3. 修了認定	
4. 改善された点と今後の検討課題	
第5章 教育内容等の改善措置	19
1. 改善措置	
2. 実務家教員と研究者教員との相互研修	
3. 改善された点と今後の検討課題	
第6章 入学者選抜等	23
1. 入学者受入	
2. 収容定員と在籍者数	
3. 改善された点と今後の検討課題	

第7章 学生の支援体制	26
1. 学習支援	
2. 生活支援等	
3. 障がいのある学生に対する支援	
4. 意見聴取・親睦	
5. 修了状況	
6. 司法試験合格者	
7. 職業支援（キャリア支援）	
8. 改善された点と今後の検討課題	
第8章 教員組織	32
1. 教員の資格と評価	
2. 教員の配置と構成	
3. 実務家教員	
4. 科目配置	
5. 研究環境	
6. 改善された点と今後の検討課題	
第9章 管理運営等	40
1. 管理運営の独自性	
2. 今後の検討課題	
第10章 施設、設備及び図書室等	43
1. 施設	
2. 設備	
3. 図書室	
4. 改善された点と今後の検討課題	
第11章 自己点検及び評価等	46
1. 自己点検・評価	
2. 情報の公表	
3. 教員の情報の公開	
4. 情報の保管	
5. 今後の検討課題	

第1章 教育の理念及び目標

1. カリキュラム

21世紀の司法を担う法曹に求められているものは、豊かな人間性や感受性、幅広い教養と専門的知識、柔軟な思考力、説得・交渉の能力等の基本的資質に加え、社会や人間関係に対する洞察力、人権感覚、先端的法分野や外国法の知見、国際的視野と語学力等である。

本法科大学院では、このような人材を育成するため、民事・刑事司法に携わりたい者、市井にあって社会的正義の実現に寄与したい者、国際社会に雄飛して渉外法務等ビジネスの分野で活躍したい者等々の、多種・多様なニーズに対応できるようカリキュラムを編成し、本法科大学院の教育理念である「良心教育」、「国際性」、「高度の専門性」に裏打ちされた専門的能力を修得できるよう配慮している。そのうえで、社会状況等を常に注視して本法科大学院の教育目的に、より適合したカリキュラムの編成・教育内容の改善に努めている。特に、本法科大学院における教育推進委員会や嘱託教員を構成メンバーとする教育推進会議等で常に議論を重ね、これら教育理念の推進に努めている。

2. 国際性

本法科大学院は同志社大学の生い立ちの影響もあり、「国際性」を教育理念の一つとしている。そのため、創設当初から、外国法・比較法を重視し、アメリカ法、イギリス法、EU法の授業を常設するとともに、海外インターンシップや外国法実地研修プログラムに加えて、ゲストレクチャーや外国のロースクールとの提携により、学生が在学中に、そして修了後にも、外国法の理論と実務を経験できる機会の充実に努めてきている。学生が、このインターンシップや研修プログラムに参加することにより、国際性を身に付け、将来、渉外弁護士としての活動への足掛りとするように努めている。

また、本法科大学院は、海外の法曹養成機関との提携にも努め、カリフォルニア大学ヘイスティングス校ロースクールとの学術交流協定を締結し（2009年4月締結）、またウィスコンシン大学ロースクールと単位互換プログラムに関する協定を締結している（2010年2月締結）。同じく、ミシガン州立大学ロースクールと包括的な学術交流協定を締結している（2010年2月締結）。

さらに、ここ数年、「アジア法」関連の科目の増設に努めるとともに、ウィスコンシン大学ロースクールとの単位互換プログラムのための科目（「外国法特別セミナー」）を開講している。「外国法特別セミナー」はウィスコンシン大学ロースクールの派遣教員が夏休み・春休みの期間に実施する集中講義による、本格的な米国ロースクールの授業として行われ、またミシガン州立大学ロースクールは本学でのサマープログラムを実施しており、本法科大学院における外国法教育は更にレベルアップされている。本法科大学院や本学法学部の教員が授業や講演を行ったほか、サマープログラム参加学生や派遣教員等と本法科大学院学生との交流会も開催されている。

3. 学内諸機関との連携

本法科大学院は独立研究科であるが、同志社大学において学問分野を同じくする法学部・法学研究科との教育・研究上の連携を図りながら教育内容等の充実に努めるために、両機関の執行部が適宜、相互の連携について協議を重ねている。また、全学的には本法科大学院執行部の各主任が定例の各種全学委員会等に出席して、全学的な教育・研究上の連携を図っている。

なお、人事的連携については、法学部教員から本法科大学院教員への移籍任用のかかる「法学部教員の司法研究科への移籍に関する特則」を置いている。

4. 入試制度

本法科大学院は、公平性・開放性・多様性を重視し、「良心教育」「国際性」「高度の専門性」の3つを柱とする教育理念に基づいて、豊かな人間性や感受性、幅広い教養と専門的知識、柔軟な思考力、説得・交渉の能力等の基本的資質に加え、社会や人間関係に対する洞察力、人権感覚、先端的法分野や外国法の知見、国際的視野と語学力を身に付けることにより、わが国の司法を担う法曹として活躍しようという強い意志を持つ人材を受け入れるため、アドミッション・ポリシーを設定し、広く公表している。

教育目的を実現するためには、法曹を目指す多様な人材を迎え入れる必要があり、本法科大学院は次のような学生を求めている。

1. 豊かな人間性と感受性、自然科学、人文科学、社会科学についての幅広い教養と専門的知識を備え、これらの素養を支える基礎学力としての読解力・理解力、社会や人間関係に対する洞察力、柔軟な思考力、表現力、人権感覚及び強い学習意欲を備えている学生。
2. 本法科大学院の特徴的な教育環境を活かし、法律専門家として高度の専門能力を培って広く活躍の舞台を拓くことができ、社会人としての対人交渉力若しくはいずれかの専門分野における職業経験を基にして、または、英語をはじめとする外国語の理解力、運用力、国際的視野を基にして、説得・交渉の能力、行動力を備えている学生。
3. 本法科大学院に法学既修者として入学を希望する場合には、上記の素養に加えて、法律科目についての基礎的な知識及び法的思考能力、法的紛争状態にある社会的事実に対する理解力・洞察力・分析力を備えている学生。

法曹を目指す多様な人材を迎え入れるために、本法科大学院は、志願者の能力をより適切に評価できる入試制度についてのあり方などを常に検討している。

5. 入学定員

本法科大学院の入学定員は、2010年度入学者から入学定員を2割削減し、1学年120人とした。

6. 改善された点と今後の検討課題

〔改善された点〕

- (1) 専任教員数を維持したまま入学定員を削減したことにより、よりきめ細やかな少人数教育がより一層可能となり、教育効果へのよい影響を期待できるようになった。
- (2) 本法科大学院の教育目的をより効果的に実現するために、各教科の間で情報を共有し合うことで教育内容等についてこれまで以上に実質的な検討ができるよう、教育推進委員会を設置して、教育推進会議も毎年2回開催している。
- (3) カリキュラム改革について検討を重ね、2012年度にカリキュラムの一部を変更した。
- (4) 長期的展望、計画性をもって教員人事を進めるために2010年1月教授会のもとに設置された「人事委員会」が活動を開始し、人事計画に基づいて、具体的な人事手続を進めている。
- (5) 入学予定者に対して毎年実施しているガイダンス（教員と共に1泊する合宿形式）を2012年度においても実施するとともに、2月～3月の期間に数回の入学前導入教育を実施して、入学予定者の不安解消に努めている。
- (6) 本法科大学院の教育理念の一つである「国際性」に関して、外国法実地研修プログラム等を積極的に実施して、学生の国際性や外国法知識の取得において十分な成果をあげた。

〔今後の検討課題〕

- (1) 本法科大学院の教育の理念は、21世紀の日本社会、国際社会で活躍できる人材の育成に寄与しようとするものであることから、また本法科大学院の学生たちが希望を持って学ぶことができるようにするためにも、一層多くの法曹を送りだせるようにすることが求められている。2012年度の司法試験合格者は全国12位の44人（前年65人）であり、合格者数では一定の成果をあげることができたが、合格率ではなお一層の改善が求められる。
- (2) 2012年度の「外国法特別セミナー」等の成果を踏まえ、「国際性」という本法科大学院の教育理念のより効果的な実現のための方策について、さらなる検討を重ねることが必要である。
- (3) 本法科大学院の教育目的を達成し教育効果を高めるためには、切れ目のない人材の確保等必要とされる人的・物的な条件整備等について検討を継続することが必要である。特に、法科大学院教員の養成については法学研究科等との連携が不可欠である。

第2章 教育内容

1. カリキュラム改革

本法科大学院は、教育内容の充実と設置科目のスリム化をはかるために、2010年度、2011年度、2012年度の各年度において、カリキュラムの見直しを行った。

I. 2010年度カリキュラム改革

(1) 総合演習科目と選択必修制

総合演習科目について、2009年度比で2科目増設し5科目とした民事法総合演習と、公法総合演習、刑事法総合演習の計7科目から、3科目を選択必修とする選択必修制を採用した。また、従来は演習クラスについてはクラス指定制をとっていたが、総合演習については、学生によるクラス選択を認めた。学生はこれにより自己の弱点を補強することができるよう、自らの判断で科目とそのクラス（担当者）を選択することができる（なお、2012年度の習熟度別クラスの導入により、総合演習のクラス選択は、同一の習熟度のクラスから選択することとなっている）。

(2) 基礎科目

「公法講義Ⅳ（行政救済法）」「刑事法基礎講義」「民事訴訟法講義Ⅱ」が新設され、「商法講義」が「商法講義Ⅰ」と「商法講義Ⅱ」に分割された。これまで授業時間が少なく、それぞれの科目につき、基本事項の理解が不十分なまま「演習」を履修しなければならなかったもので、授業時間を増やすことにより、段階的な学習が可能になり、基本事項を理解したうえで演習に取り組むことができるようになった。

(3) 展開・先端科目

司法試験の選択科目に相当する科目は「展開・選択科目Ⅰ」という名称でD群にまとめられている。司法試験の選択科目でない科目は「展開・先端科目Ⅱ」という名称でE群にまとめられている。学生の要望に応じて、専門分野に特化した法曹を養成する態勢の充実のため、「著作権法Ⅱ」「租税法Ⅱ」「倒産法Ⅱ」などの科目がD群に増設され、また、債権法改正に向けた立法作業が進められることをにらんで、債権法改正の動向をタイムリーにフォローできる科目がE群に設けられた。

(4) 基礎学力向上のための講義科目

2009年度には、基礎学力向上のために、「C群 基幹科目」に、選択科目として、「刑法特講Ⅰ」「刑法特講Ⅱ」「現代法律行為論」「法定債権法」「親族法」「相続法」「刑事訴訟法特講」「捜査法」「刑事公判法」「民事訴訟法特講」の科目が置かれていたが、さらに「商行為法・手形法」「会社法特講」を置き、各自の判断で追加的に履修できるようにした。

(5) 応用ゼミ

「応用ゼミ」のいくつかのものは各群の科目に移すことにしたので、2010年度からは、それでカバーできないテーマに限って、例外的に設置されている。このゼミでは、その時々的重要トピックを機動的に学修する機会を提供することとし、受講者数には上

限（30人）を設けている。そのことで、担当教員のきめ細かな指導を受けることができるようにした。

(6) 外国法科目

アメリカ法関連科目の若干のものが整理・統合される一方、アジア法が置かれた。「アジア法Ⅰ」では中国法が、「アジア法Ⅱ」では韓国法が講じられている。

(7) 法律実務演習科目

学生の要望に応じて、特定のテーマについて論理的な、また法曹として適切な文章を書くことができるよう、文章力育成のために法律実務演習科目が新設された。文章による表現になれていない学生のための科目であり、原告側あるいは被告側の代理人として、内容の面でも表現の面でも適切な表現でもって文書が作成できるよう指導している。原則として、研究者教員と実務家教員の2名で担当する。テーマの選定は担当者に委ねられている。

II. 2011年度カリキュラム改革

(1) 法学既修者の履修方法の変更

2011年度入試から、法律科目試験の総合得点では法学既修者としての合格レベルにあるが民法以外の特定科目（1科目）が基準点に満たない受験生について、A群基礎科目（必修科目）の当該分野の科目の履修を免除しないことを条件に法学既修者として合格させることとしたため、履修を免除しなかった科目については、入学初年度に、当該分野のA群基礎科目と当該分野の演習科目（C群必修科目）を並行履修することを可能とした。これに伴い、第1年次の登録単位数の上限（36単位）を当該科目の単位分について（6単位が上限）を超えて登録することができることとした。

※入試における法律試験科目の成績により、履修を免除されないA群基礎科目（必修科目）の対応関係は下記のとおりとしている。

法律科目試験	履修を免除されないA群基礎科目（必修科目）
憲法	公法講義Ⅰ（人権）、公法講義Ⅱ（統治組織）
行政法	公法講義Ⅲ（行政法総論）
刑法	刑事法基礎講義、刑法講義Ⅰ（総論）、刑法講義Ⅱ（各論）
刑事訴訟法	刑事法基礎講義、刑事訴訟法講義
商法	商法講義Ⅰ、商法講義Ⅱ
民事訴訟法	民事訴訟法講義Ⅰ、民事訴訟法講義Ⅱ

(2) 「公法実務の基礎」の設置群変更及び履修方法の変更

「法律実務基礎科目の4単位の必修又は選択必修化」に対応するため、「公法実務の基礎」をB群1類からH群1類に変更し、H群についての履修方法を、「H群1類から2単位以上かつH群から4単位以上を選択履修すること。」から「H群1類から4単位以上を選択履修すること。」に変更した。

(3) 「公法講義Ⅳ（行政救済法）」の科目設置取り止め及び法学未修者第1年次の年間登

録制限単位数の変更

A群1類選択科目「公法講義Ⅳ（行政救済法）」の設置を取り止めた。これにともない、法学未修者第1年次の年間登録制限単位数を42単位から40単位に変更した。

(4) 「行政救済法」の科目新設

C群2類に「行政救済法」を新設した。

(5) 「国際人権法」及び「国際経済法」の設置群変更

「国際人権法」及び「国際経済法」が司法試験科目の国際関係法（公法系）の対象から外れるため、D群からE群に変更した。

Ⅲ. 2012年度カリキュラム改革

(1) 2012年度入学者より、取得単位数及びGPAを基準とする進級制度を導入した。

GPA基準により進級を認められない者については、成績不良（C評価）科目の単位及び成績を無効とし、次年度以降に再度登録履修しなければならないこととした。

(2) 2012年度入学者より、教育内容をより充実し、教育効果を上げるために以下の科目の新設・廃止・変更を行った。

①A群基礎科目をスリム化する意味で、法学未修者1年次配当の必修科目「刑事法基礎講義」を廃止した。

②C群基幹科目に法学未修者3年次・法学既修者2年次配当の必修科目「公法演習Ⅲ」, 「公法演習Ⅳ」, 「民事法演習Ⅶ」を新設した。

③法学未修者3年次・法学既修者2年次配当の選択必修科目「公法総合演習」を従来の2単位から「公法総合演習Ⅰ」（1単位）, 「公法総合演習Ⅱ」（1単位）に分割して配当した。また、同じく選択必修科目の「民事法総合演習Ⅳ」, 「民事法総合演習Ⅴ」を廃止し、「民事法総合演習Ⅰ」の単位数を2単位から1単位に変更した。

(3) 学生の習熟度に応じてきめ細やかな指導を実現するため、習熟度別クラス編成が導入された。C群必修科目（演習）及びC群1類選択必修科目（総合演習）を対象として、「通常クラス」（基礎学力を補いつつ、司法試験の合格に必要な学力を備えさせる水準を確保するクラス）のほかに、「Aクラス」（修了直後の司法試験に合格できる学力、上位合格に対応する学力を練成するクラス）および「Rクラス（再履修クラス）」（学修方法を確立し、基礎学力を補いながら、司法試験の受験に必要な学力を練成するクラス）を設けて指導を行うこととした（なお、科目によっては、「Aクラス」と「通常クラス（再履修者を含む）」の編成となる場合もある）。

2. 科目群

2012年度のカリキュラム改革を経た科目群を整理すると以下のようになる。

法曹としての責任感や倫理観を涵養するため「法曹倫理」を必修科目とし、「G群 基礎法・隣接科目」において現実に生じている社会問題にも焦点を当てるなどして、理論と実務の架橋となる専門職教育を行うよう配慮している。また、諸外国の法制度を学ばせる「F

群「外国法科目」に関係した科目を多数設置し、履修させている。このように、良心を基礎として法を運用し、豊かな人間性と幅広い教養、高度の専門性を持ち、多角的な視点及び国際的な視野を有する法曹を養成するという、本法科大学院の設立の理念に沿う科目群としている。

A群：「基礎科目」（法学未修者を対象とする法律基本科目及び法学の基礎に関する科目）

法学未修者を対象にした科目群であり、法律学の基本概念の理解、法的思考方法及び事例に即した問題解決能力を修得させ、入学後1年で、2年コースの法学既修者に相当する学力を持たせることを目的にして編成されている。

B群：「法曹基本科目」（裁判実務の基礎及び法曹倫理に関する科目）

法曹としての実務的専門能力を養成するための科目群で、「刑事訴訟実務の基礎」「民事訴訟実務の基礎」を設置している。専任の実務家教員のほか、派遣裁判官、派遣検察官を科目担当者として配置している。また、実務家として必要な高度の倫理性を身に付けさせるため、「法曹倫理」を設置している。また、入学直後に法律文書の基本型である要件効果モデルの構造、基礎的な作文技法、判決文のスタイルと読み方を学ぶ「法情報調査・文書作成入門」が2010年度から加わっている。

C群：「基幹科目」（法律基本科目に関する演習科目及び講義科目）

カリキュラム全体の中心に位置する科目群であり、ここでは解決を必要とする問題を明らかにし、多面的考察の下に複数の解決手法を示し、それらの中から最適の解決方法を探究することとする。つまり、高レベルの法解釈能力を養う教育を行うことが、この科目群の目的である。また、実体法と手続法の相互関連性等や関連科目を一体的に理解させ、総合的な理解力・応用力を養成することを目的に、演習に加えて総合演習を設置している。

D群：「展開・先端科目Ⅰ」（法律基本科目以外の応用的先端的な法領域に関する科目の内、司法試験の選択科目に関するもの）

必修の基幹科目で養った学力をさらに発展させ、高度の専門性を身に付けるための科目群であり、展開・先端科目の内、「労働法」「経済法」「知的財産法」「国際関係法」など、司法試験の選択科目に対応する科目が集められている。

E群：「展開・先端科目Ⅱ」（法律基本科目以外の応用的先端的な法領域に関する科目の内、司法試験の選択科目となっていないもの）

必修の基幹科目で養った学力をさらに発展させ、高度の専門性を身に付けさせるための科目群であり、法改正の動向について情報を提供し、実務に対応できる先端知識を学ばせ、法的紛争の解決能力を修得させる。多くの先端的法領域を網羅し、実務法曹としての高度の専門性を養成し、現代における法的紛争の多様化に応えるために必要な科目が配置されている。

F群：「外国法科目」（諸外国の法制度や法解釈に関する科目）

外国法制に精通した教員が、アメリカ法、イギリス法、EU法、アジア法等を教授するための科目群であり、諸外国の実務家に伍していける技能を修得させる。「外国法実地研修」や「海外インターンシップ」では、外国法が適用される現場を訪ね、渉外法務を、

身を以て体験することができる。「海外インターンシップ」の2009年度と2010年度の派遣先はシンガポール、2011年度の派遣先はオーストラリアであった。プログラムで研修を実施する「外国法実地研修A」は、2009年度以降は登録者が定数に満たなかったり、担当者の在外研究のため実施することができなかった。ヨーロッパ諸国で研修を実施する「外国法実地研修B」は、2009年度は担当者の在外研究のため実施することができなかったが、2010年度・2011年度・2012年度は実施した。派遣先は、カールスルーエ、フランクフルト、ストラスブール、ルクセンブルク、ブリュッセル、デュッセルドルフ等。

G群：「基礎法・隣接科目」（基礎法学及び法学に関連する分野の科目）

実務法曹として必要な、実定法解釈の方法論、価値判断体系を身に付けるための科目群であり、「法理学」「比較法文化論」「法社会学」「現代人権論」等の科目は、法学未修者も1年次から体系的に学修できるよう配置されている。

H群：実務関連科目（法曹としての技能や法律実務に関する科目）

B群科目と連携して、実務に必要な専門的能力を養成する科目群であり、「刑事模擬裁判」「民事模擬裁判」「クリニック」「エクスターンシップ」「公法実務の基礎」「法律文書作成」「法律実務演習」が設置されている。これらの科目は全て実務家教員が中心となって担当する。「刑事模擬裁判」「民事模擬裁判」では、ロールプレーによる裁判実務の体験的学習を試みている。「クリニック」では、相談者の真意をどのようにして引き出すか等の実務教育が、「法律文書作成」では、民事関係の具体的事案を材料にして文書作成の技法の修得等の実務教育が行われている。「エクスターンシップ」では、学校法人同志社の諸学校の卒業生で構成されている同志社法曹会、京都弁護士会及び大阪弁護士会等の協力を得て弁護士事務所に学生を派遣し、実務能力の養成が行われている。「公法実務の基礎」は、公法系訴訟実務の基礎を内容としている。「法律実務演習」では、法律実務家として適切な文章が書けるよう、表現力を養成する。法律実務演習科目では、裁判所に提出する法律文書作成よりも、より基本的な書面作成技法を学ばせることとしている。純粋未修の学生にとって法的思考に即した文章を作ることもかなり困難を伴うので、基本的技法の習得を目的としている。

3. 修了必要単位数

従来は102単位以上とされていた修了必要単位数について、2007年度に見直しの検討を行い、2008年度入学生から96単位以上（必修68単位、選択科目28単位以上）に削減し、併せて2008年度に既に在籍中の学生にも遡及的に適用する措置を採った。もっとも2010年度より、未修者教育を強化する目的で、A群科目を6単位増加したのに伴い、修了単位数を再び102単位以上に改めた。2012年度のカリキュラム改革を経た後の内訳は、（1）必修科目は、A群から32単位、B群から6単位、C群から28単位の合計66単位、（2）選択科目は、C群1類から4単位以上、D群・E群から12単位以上、F群・G群から各々2単位以上の計6単位以上、H群1類から4単位以上を含む、合計36単位以上である。

なお、法学既修者の場合は、A群基礎科目（必修科目）32単位を修得したものとみなされ履修を一括免除された者は、必修科目34単位（B群6単位・C群28単位）、選択科目36単位以上の履修を必要とする。A群基礎科目（必修科目）32単位のうち特定分野の科目の単位を修得したものとみなされず履修を免除されなかった科目がある者は、当該科目の単位及び必修科目34単位（B群6単位・C群28単位）、選択科目36単位以上の履修を必要とする。

4. 改善された点と今後の検討課題

〔改善された点〕

- (1) 入学定員を削減したことによりこれまで以上に小クラスでの授業が可能になり、学生個々人の能力を把握して、授業を進めることができ、また授業中の議論、質疑応答も密に行うことができるようになることが期待できる。また、講義・演習において各担当者の授業の改善、例えば、基礎概念の理解を深める、問題検討の道筋を考えさせるなど新しい試みも期待できる。
- (2) 2010年度カリキュラムにより、
 - ①未修者教育充実のための基礎科目等が充実し、学生の基礎学力の向上が期待できる。
 - ②民事法総合演習科目が増設され、また総合演習科目を必修制から選択必修制とすることになり学生の授業選択の自由度が高められ、学生の各科目の習熟度に応じた履修計画の設定が可能になった。
 - ③C群選択科目の見直し（一部E群への移行）等が行われ、履修上の制約に対する配慮がなされた。
 - ④H群に法律実務演習科目が新設され、書面教育の充実がはかられた。
 - ⑤F群にアメリカ法、イギリス法、EU法に加え、アジア法関係科目が新設され、外国法教育を更に充実させることができた。
- (3) 2012年度カリキュラムにおいて、必修科目のバランスが整えられたことにより、教育内容の充実および教育効果の向上が期待できる。
- (4) 2012年度に導入された習熟度別クラス編成により、学力に応じた、効率的できめ細やかな指導が可能となった。
- (5) 2008年度・2009年度の両年度に、文部科学省の専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム「法科大学院コア・カリキュラムの調査研究」に基き、法科大学院における「共通的な到達目標（コア・カリキュラム）モデル案」が公表され、2010年9月には第2次案修正案も公表された。このモデル案を法科大学院の教育に導入するため、本法科大学院でも検討し、さらに共通のフォームのもとで詳細かつ体系的な各科目における共通の到達目標を作成した。

〔今後の検討課題〕

- (1) 学生は司法試験科目を中心に履修する傾向にあるが、法曹として持つべき幅広い教養や専門性に関して、司法試験科目以外の科目の選択について何らかの指針を示すこ

とがよいのかを検討する必要がある。

- (2) 司法試験の合格者数は過去数年間、いずれも期待したほどには多くない。その原因の一つは基礎学力の不足にあるものと思われる。導入教育等、各法の基礎を理解させる具体的な方策を検討してきたが、昨年度及び今年度、その成果が若干現れたかにみえる。しかし、今後、各法分野間での連絡をさらに密にし、より大きな成果を目指す必要がある。
- (3) 2010年度から、修了必要単位数が96単位から102単位に増えることにより、学生の基礎学力の向上が期待されたが、選択制を導入したために、その選択に偏りが出て学力向上の機会を失っている学生がいないか等、選択制の見直しを含めた検討が求められる。単位増によって学生の自由な学習時間が減少することになり、そのために何らかの問題が生ずることも想定される。状況を注意深く見守ることが必要である。

第3章 教育方法

1. 授業のかたち

本法科大学院では、演習を1クラス15～20人で行い、基幹科目の少人数教育を実現することで、双方向、多方向形式の議論による法理論の理解を徹底し、実務的な法運用の鍛錬を行っている。講義、演習で十分に理解しきれない場合には、オフィス・アワーや指導教授制度等を積極的に活用させると共に、若手弁護士にアカデミック・アドバイザーとして授業を補完する内容でゼミを開講してもらい、その利用を勧めている。

〔授業を行う学生数〕

本法科大学院の教育課程は、法科大学院設置基準の趣旨に従い、A群からH群までの各科目から編成されている。

A群科目（「基礎科目」）は、法学未修者を対象にして、原則40人を1クラスとして講義を進めるものである。B群科目（「法曹基本科目」）についても、1クラスの学生数は、原則40人である。C群科目（「基幹科目」）の演習科目は、原則20人までのクラス編成で行ってきた。

〔他研究科開講科目の履修等〕

本法科大学院の学生は本学の他研究科開講科目を履修することができる。また、関西4大学（同志社大学・関西大学・関西学院大学・立命館大学）の協定に基づく単位互換制度により、本法科大学院の学生は他大学の法科大学院開講科目を履修することができる。2012年度は、他大学の法科大学院開講科目や本学の他研究科開講科目を履修している本法科大学院の学生はいない。

本学の他研究科の学生が本法科大学院開講科目の履修を希望する場合、本法科大学院が定める条件を満たせば履修が認められる。また、関西4大学の協定に基づく単位互換制度により、他大学の法科大学院生は本法科大学院開講科目を履修することができる。2012年度は、本法科大学院開講科目の2科目で、本学の他研究科の学生5名の履修者があった。なお、本法科大学院開講科目を履修している他大学の法科大学院生はいない。

2. 授業の方法

〔専門的な法知識と具体的な応用能力の育成〕

双方向型ないし多方向型の授業が可能な少人数教育を基本とし、授業中の対話やレポートの作成・提出等の方法を用いてきめ細かい指導を行うことにより、基本的な法的知識の修得を図るとともに、法的思考力、分析力、表現力の養成を目指している。

A群科目（「基礎科目」）は、法学未修者のための開講科目であることから講義形式を取るが、学生の予習度、講義の理解度、応用能力をチェックするために、小テストや中間テストを実施し、あるいは質疑応答の機会を適宜設けるよう努めている。また、相当数の科目において、具体的な事例についての討議も適宜行われている。C群の必修科目（「基幹科

目)は全て演習であり、具体的な事例検討を前提とした徹底した双方向形式での授業が行われている。

B群科目(「法曹基本科目」)、D群科目(「展開・先端科目Ⅰ」)、E群科目(「展開・先端科目Ⅱ」)、F群科目(「外国法科目」)、G群科目(「基礎法・隣接科目」)、H群(「実務関連科目」)においても、その科目の特質に基づいて、教員の裁量の下、双方向での授業を原則としながら、授業形式についてはさまざまな工夫が凝らされている。

実務関連科目の「エクスターンシップ」については、2012年度は、関西圏の31法律事務所で学生が研修をしている。

授業時間以外でも、専任教員のオフィス・アワーを利用したり、アカデミック・アドバイザーが担当するゼミを受講することで、学生が疑問点を解消することができる態勢をとっている。科目によっては、担当教員がe-learningの基盤として学内で整備された教育支援システム(e-class, DUET, TKC教育研究支援システム等)上の掲示板や理解度確認システム等を積極的に活用する等して、学生の理解度をさらに深める等、授業の効果を高めるために創意工夫をしている。

〔授業計画・授業内容の事前開示、成績評価基準〕

1年間の授業内容や成績評価方法(定期試験と平常点評価の割合やその評価基準)については、シラバスにより、事前に受講生に周知されている。なお、本法科大学院はGPAによる成績評価を行っている。各科目の成績評価結果分布もウェブ上で公表している。

教材、資料、レジュメ等は、多くの科目について、開講前に全授業回数分配付される。また、それ以外の科目についても、授業日の1週間前には原則として毎回配付され、学生の予習に十分な配慮をしている。学生の教材入手をより容易にするために、e-class, TKC教育研究支援システム等を利用して教材を配布している科目が増えてきている。

〔書面作成教育の充実〕

法律専門家にとって必須の法律文書作成スキルを段階的に訓練する科目を充実させている。

- (1) 入学直後には、法情報調査・文書作成入門において、法律文書の基本型である要件効果モデルの構造、基礎的な作文技法、判決文のスタイルと読み方を学ぶ。
- (2) 法律基本科目の演習・総合演習においても、具体的事例を素材にした文書作成の機会を設け、文書作成能力の涵養を努めている。
- (3) 実務関連科目に、特定の法律分野における実務書面の作成を行う法律実務演習を設置している。受講生を1クラス約10人に絞り、実践的な事例に則して、専門家として作成すべき実務文書の作成技法を指導している。

〔導入教育の充実〕

2010年度からは、入学後スムーズに学習ができるように学習方法などの指導について、これまで散発的に行われていた導入教育を法律基本科目担当の教員が担当し、系統的

に行っている。

〔コア・カリキュラムへの対応〕

「法科大学院における共通的な到達目標モデル（第二次案修正案）」（コア・カリキュラム）を教育に導入し、教員による計画的な教育及び学生による計画的な学習を推進するため、共通のフォームのもとで、詳細かつ体系的な各科目における共通の到達目標を作成した。この共通の到達目標は、2012年度より学生に配布している。

〔TKC「授業理解度確認テスト」の活用〕

2012年度秋学期から、TKC「法科大学院教育研究支援システム」における「授業理解度確認テスト」等を活用することにより、授業で学習した知識の定着を図るとともに、教員が個々の学生の理解度を把握することが可能となった。これにより、学生の理解度が十分でない点を再度解説するなど、学生の理解度にきめ細かく対応した授業を行うことが期待できる。

3. 履修科目登録単位数の上限

年間登録制限単位数は36単位（但し最終学年は44単位）であったが、2010年度より未修者教育を強化する目的でA群科目を6単位増加したのに伴い、未修者1年次については42単位とした。2011年度からは、A群1類選択科目「公法講義Ⅳ（行政救済法）」の設置を取り止めたことに伴い、40単位に変更し、2012年度からはA群必修科目「刑事法基礎講義」の設置を取り止めたことに伴い、38単位に変更した。その結果、年間登録単位数の上限は、以下のようにになっている。なお、1学期の登録単位数は1単位以上22単位を限度としている。

	第1年次	第2年次	第3年次
法学未修者として入学した者	38単位	36単位（注2）	44単位
法学既修者として入学した者	36単位（注1）	44単位	

（注1）法学既修者については、履修を免除されなかったA群基礎科目（必修科目）がある場合、第1年次に限って、当該科目の単位分について（4単位が上限）、36単位を超えて登録することができる。

（注2）法学未修者1年次から2年次に進級した者で、再履修が必要なA群必修科目がある場合は、当該科目について4単位を上限として、36単位を超えて登録することができる。

4. 改善された点と今後の検討課題

〔改善された点〕

（1）少人数教育の徹底

2010年度から入学定員が120人になったのを機に、演習科目は20人弱のクラ

サイズで行っている。このように少人数教育の理念を一層徹底し、教員が学生の理解度をきめ細かくチェックしながら、学生一人ひとりのニーズに合った適切な指導を図る体制を既に整えている。

(2) 学生の負担を十分に考慮した授業内容及び教材の精査・改善

本法科大学院では、市販の演習書等を利用する一部の授業を除き、教材の開発を独自に行っている。かつては、学生が予習・復習に要する時間を十分に考慮せず、関連する判例、参考とすべき論文等を多数配布する例もあったため、学生に過大な負担となっているという問題点が指摘されていた。この点は、授業評価アンケートの分析結果を踏まえて、科目担当者間で念入りに議論・検討したため、かなりの問題が改善された。さらに最新の判例・学説の動き等を考慮して、新年度の開始前に、毎年教材の改訂作業を行っている。

同一科目を複数の教員が担当する場合、担当者間で個別に会議の場を設定し、綿密な情報交換がなされている。

(3) その他教育方法における改善点

① 2009年度から継続して取り組んでいるもの

- ・在学生に対して、直ちに改善可能な授業運営上の問題点に迅速に対応するため、各学期に中間アンケートを実施し、一定の成果をおさめている。
- ・特に純粋未修者のスタートアップを支援するための導入教育において工夫を重ねており、一定の成果をおさめている。
- ・書面教育の充実及び各学生の理解度をきめ細かに把握しながら授業を運営するために、C群必修科目・選択必修科目を中心に、小レポートを適宜実施する科目を増加し、同時にレポート等による学生の負担のバランスにも配慮するよう、科目担当者間で調整を図っている。
- ・担当教員の裁量により、学期末試験（未採点）解答用紙の持ち帰りを認める措置（複写式答案用紙の使用）もしくは、採点後の答案（複写したもの）の返却を行うこともある。加えて、講義担当者による講評会を開催しており、学期末試験の結果に対するフォローを充実させている。

② 2010年度から継続して取り組んでいるもの

- ・総合演習を選択必修科目化することにより、各学生の勉強の進捗状況や得手不得手に応じて、柔軟に履修計画を立て、限られた時間内にできるだけ効果的に学習を進められるよう配慮している。
- ・法律実務演習科目が新設され、書面教育の充実が一層図られている。
- ・従来の指導教授制度では学生の意思に関係なく各学生の指導教授を設定していたが、2010年度からは、「学生の選択による指導教授制度」を導入し、個々の学生の希望とニーズに応じたきめ細かな指導を行っている。
- ・教育方法の改善について、FD委員会と執行部との連携が強まった。

③ 2012年度から、C群必修科目（演習）及びC群1類選択必修科目（総合演習）を対象とし、習熟度別クラス編成が導入された。本研究科の受験者数が減少するにつれ

て、入学者の学力の開きが拡大し、全体的な学力も低下しつつあることから、学力に応じた、効率的できめ細やかな指導を行っている。

〔今後の検討課題〕

- (1) 教材が法科大学院の教育目的に適っているか、教材の難易度が適切であるかについて、引き続き検討を重ねていくことが必要である。
- (2) 2012年度から導入された習熟度別クラス編成の下では、クラスに応じて教育の内容、水準が異なることがあるが、全クラスの学生共通の基準による公平かつ厳格な成績評価を確保しなければならない。また、学力に応じた、効率的できめ細やかな指導を実現できているか、授業評価アンケートなどを通じてモニターし続ける必要がある。
- (3) 効果的な導入教育ならびに書面教育の方法についても、なお工夫の余地がある。特に過年度の法律実務演習科目の実績をふまえて、成果と問題点を検証する必要がある。

第4章 成績評価及び修了認定

1. 成績評価

本法科大学院における成績評価は、原則として定期試験と平常点によって行われている。大半の科目は学期末に筆記試験を実施している。筆記試験に代えてレポート試験を課す科目もある。複数のクラスを開講している演習科目及び総合演習科目では全クラスを単位にして学生の実力を測定するため、科目ごとに全クラス統一試験を実施している。

追試験は、一定の条件を満たし、やむを得ない事情のある学生にのみ認められている。

成績評価は、具体的には、これらの試験などの結果をもとにして評価されているが、多くの科目では、評価に当り、出欠状況や発表等に基づく平常点、小テスト、小レポート等による成績評価も加味し、学生の実力を反映できるシステムとなっている。なお、本法科大学院では、5回以上の授業欠席者は学期末試験の受験資格がなくなる。

本法科大学院では、開設時からA+～Fの7段階で評価してきたが、2012年度から成績評価について以下のように評価と評点に対応する素点も示して明確にしている。

評価	評点	素点
A+	4.5	90点以上 100点以下
A	4.0	80点以上 90点未満
B+	3.5	75点以上 80点未満
B	3.0	70点以上 75点未満
C+	2.5	65点以上 70点未満
C	2.0	60点以上 65点未満
F	0.0	0点以上 60点未満

また、教授会において、下記の事項も「成績評価に関する申し合わせ」として合意し、2012年度から実施している。

- (1) A+及びFの各評価は絶対評価により、その余の評価は相対評価による。A+の評価は、本法科大学院の共通的な到達目標における各学年あるいは修了時まで確実に習得すべき知識・能力の内容・水準として到達目標に照らして、特に優れた成績を修めたものとする。Fの評価は、上記共通的な到達目標の各学年あるいは修了時まで確実に習得すべき知識・能力の内容・水準としての到達目標に照らして、その到達目標に達してなかったものとする。共通的な到達目標を設定していない科目については、それに準ずるものとしてシラバスに記載した到達目標に照らして、同様に判断するものとする。なお、複数クラスを開講する科目においては、A+又はFの評価をするとき、当該科目の担当者全員により当該筆記試験の答案及び当該者の平常点を確認する。
- (2) 受講生が15人を超える同一科目については、開講クラスの全てを通じて、全受験者のうち、A、B+、Bの評価の割合は、それぞれ15%程度、20%程度、30%程度を上限とする。
- (3) 必修科目（総合演習を含む。）におけるFの評価基準については、成績提出後に

報告書を提出するものとし、その報告を受けて、評価及び評価基準の適否を点検する会議を学期ごとに開催する。

- (4) 複数のクラスを開講する科目の場合、全クラスについて同じ基準により評価する。特に、習熟度別のクラス編成を行う科目については、受講者全員の答案を一人の採点者が通して採点する方法か、受講者全員の答案のクラスが混ざるように束を作成した上で、各担当者が束毎に分担して採点する等の方法によって、クラス間の公平性が客観的に確保されるように評価する。

各担当者が、教育効果の測定について工夫をしているが、さらに、担当者間の連携を密にして、各系毎に改善・改革の余地がないかを常に点検している。

成績評価基準に従って成績評価が行われることを確保する措置として、以下の態勢もとっている。

- ① 学生は、成績評価に対して納得がいかないときには異議申立てをすることができる。
- ② 異なる科目を担当する各教員間においても成績評価尺度を共有するため、教授会等で各科目の成績評価方法や基準を報告するなどして、教員間で共通認識を形成する。各科目・各クラスの成績評価分布は、教授会で全教員に周知されるとともに本学ホームページで全学生に公表されている。これにより、成績評価の適正さと客観性を維持する効果を高めている。
- ③ 各科目の成績評価基準について、シラバスで学生に開示している。

2. 進級制度

2012年度から、以下の基準によるGPAを用いた進級制度を導入している。

- (1) 法学未修者1年次を終了する年度末において、A群必修科目32単位のうち28単位以上を修得し、かつ、A群必修科目の評定平均(GPA)が2.3以上である者は、次の年次への進級を認める。
- (2) 法学未修者2年次を終了する年度末において、次の点をすべて満たす者は、次の年次への進級を認める。
 - ・ A群必修科目32単位を修得し、かつ、その評定平均(GPA)が2.3以上であること。
 - ・ B群必修科目及びC群必修科目の計28単位のうち24単位以上を修得し、かつB群必修科目及びC群必修科目の全体の評定平均(GPA)が2.3以上であること。
- (3) 法学既修者1年次を終了する年度末において、次の点をすべて満たす者は、次の年次への進級を認める。
 - ・ A群必修科目32単位を修得していること。
 - ・ B群必修科目及びC群必修科目の計28単位のうち24単位以上を修得し、かつ、B群必修科目及びC群必修科目の全体の評定平均(GPA)が2.3以上であること。

3. 修了認定

本法科大学院を修了した者には、「法務博士(専門職)」の学位が授与される。修了認定の要件は、3年間の在学と所定の履修方法による102単位の取得であるが、法学既修者の場合は、原則として「A群 基礎科目」(32単位)の履修が免除され、また、在学期間

も1年間短縮される。

4. 改善された点と今後の検討課題

[改善された点]

- (1) 教員間における合否の評価尺度の共有化を図るために、各学年における到達目標を作成すると共に、各科目の到達目標をシラバスに記載することにした。これにより、科目間で意思が統一化され、より整合性が図られることになった。
- (2) 同一科目でも複数クラスで授業が行われる場合や異なる科目間での評価尺度の共有化を徹底するために、平常点の付け方等具体的な諸点について詰めあわせを行ったことにより、共有すべき評価尺度、その評価尺度の共有化の手立てなどがより明確となった。
- (3) 学期末試験の答案の作成方法について、個別的な指導をできるように検討し工夫した結果、かなりの教育効果が現れてきている。たとえば、科目担当教員の判断で複写式の答案用紙を使用することができるようにし、当該科目については学生が試験終了後に自分の答案（副本）を持ち帰ることができるようにした。この方式によれば、試験問題の講評の際に学生が解答した答案を目にしながらか、理解を深めることができるので、担当者による利用が増えてきている。

[今後の検討課題]

- (1) これまでの改革の成果を踏まえて明確化した成績評価基準の有効性について検証していくと同時に、成績評価を客観的で厳正なものにする努力を重ねていくことが求められる。
- (2) 成績評価基準の適正な運用について、成績評価に対する異議申立制度の利用も勘案しながら、今後ともさらに注視していきたい。

第5章 教育内容等の改善措置

1. 改善措置

〔FD委員会〕

2012年度は、FD委員会を4月～12月の間に4回開催し、教育の内容及び方法の工夫、改善を図るための方策等についての検討、取組を行った。

FD委員会の委員は、公法、刑事法、民事法、外国法の各分野の担当者からバランスよく構成されるように配慮されている。ちなみに2012年度の委員は、行政法1人、民法2人、刑法1人、刑事訴訟法1人、民事訴訟法1人、商法1人、国際私法1人の計8人である。

なお、2012年度においては、2011年度に制定された「成績評価に関する申合せ」に沿って、必修科目における「F」の評価基準についての報告書内容を確認し、教育推進会議の場で総括を行った。

〔教員推進委員会・教育推進会議〕

2009年度より、教育推進委員会（2012年度は執行部のメンバーに4人の専任教員を加えた計10人の委員で構成し、教務主任を補佐する）・教育推進会議を設け、各科目の履修方法、授業時間割の設定方法、学生の選択による指導教授制の導入、修了生に対するサポート体制、授業内容の改善等々につき、検討を行ってきた。2012年度も同様の方針で、教育推進会議2回を開催し、必修科目におけるF評価基準報告書、習熟度別クラス、入試制度、カリキュラム改正などにつき検討するとともに意見交換を重ねた。

〔習熟度別クラスの導入〕

2012年度より、2L配当の必修科目及び3L配当の選択必修科目のクラス編成に「習熟度別クラス編成」が導入された。該当科目を履修する学生は、前学期の対象科目の成績を元に成績上位層と下位層に習熟度を分けられ、それに伴って履修するクラスを指定されることになった。

〔F評価基準報告書の検討〕

「成績評価に関する申合せ」が改正されたことに伴い、必修科目（総合演習科目を含む）の担当者から提出された学期末評価の基準について、FD委員会において検証を行った。この検証は、厳格な成績評価が各科目・分野でなされているかをFD委員会として組織だてて検証するものであり、2012年度から新たに始めたことである。検証結果については、教育推進会議の場でFD委員会からのコメントとして報告されている。

〔「共通的な到達目標（コア・カリキュラム）モデル案」の検討〕

2009年度に2回、2010年度に1回、「共通的な到達目標（コア・カリキュラム）モデル案」について教授会で懇談しているが、共通の到達目標の策定は急務であるとの認識のもとに一部の科目担当者及び各系によってモデル案に依拠した共通の到達目標の検討と作成が行われていた。2011年度においては、さらに共通のフォームのもとで詳細かつ体系的な各科目における共通の到達目標の作成を進め、2012年度より学生への配布

を行っている。教員による計画的な教育及び学生による計画的な学習に向けての活用がこれまで以上に進められることとなり、その効果が期待されている。

〔学期末試験の講評会〕

当初は、各教員は任意の形で、学期末試験終了後に受講学生に対して当該試験の講評会を行っていたが、2010年度からは、2週間程度の期間を設定して講評会を実施することとしている。2012年度春学期及び秋学期においては、2週間程度の期間（各々8月30日～9月12日、2月18日～3月1日）を設定して講評会が実施された。

〔授業傍聴等〕

2005年度から他の教員の授業傍聴を行うことが始められ、2007年度からは、春・秋学期毎に、約2週間程度の「授業傍聴週間」を設け、各教員が事前の連絡なしに、自由に他の教員の授業を傍聴できる仕組みを制度化した。2012年度は、主に各教員の出講日におこなわれる授業から傍聴を推奨する授業を割り当てたものを提示し、傍聴がより一層円滑に進むように工夫した。傍聴結果の報告文書の提出を義務づけた上で、提出された報告文書を担当教員に配布することによって、授業の改善に役立てることができるようにしている。

〔学生による授業評価アンケート〕

学生による授業評価アンケートは、開設以来毎年春・秋学期に実施している。2012年度春学期は、7月23日～7月27日、秋学期は1月21日～1月25日に実施した。

なお、アンケート実施対象教員は、兼任、兼任を含む全教員で、対象科目は、登録者が10人未満の科目を除く全科目とした。アンケートは回収後、司法研究科事務室で整理したものを、各担当教員に配付し、個々の授業内容や方法の改善に役立てている。点数評価の項目については、学年毎にグラフ化し、アンケートの現物と共に各担当教員に配付している。

〔授業に関する中間アンケート〕

授業評価アンケートは2008年度まで学期末にのみ実施してきたが、この方法では、アンケート結果を当該学期の授業改善に役立てることができない。そこで、2009年度から、それぞれの学期の授業が開始されてから3分の1程度の授業回数となる時期に中間アンケートを実施し、その結果を直ちに授業改善に役立てることにした。2012年度、春学期は5月14日～5月18日に、秋学期は10月23日～10月29日に実施した。

〔在学生・修了生からの意見聴取〕

例年、教授会終了後に「司法試験合格者の意見を聞く会」を開催し、教材、授業の進め方、その他授業一般について司法試験合格者の意見を聴取する機会を設けている。また、毎年2回、茶話会形式で「学生と教員の懇談会」も行い、在学生の意見を聴取している。2012年度も同様に「司法試験合格者の意見を聞く会」や「学生と教員の懇談会」が行われた。なお、学生からの意見は投書箱においても受け付けており、そこでの申出は執行部において対応している。

〔成績評価に対する学生の異議申立て〕

本学では、全学的にクレーム・コミッティ制度を設けている。本法科大学院においても大学のクレーム・コミッティの委員の1人を含めて4人の委員からなる司法研究科クレーム・コミッティを設置している。学生からの成績評価に対する異議申立てについては各教員が対応するものの、なお問題が解消されない場合においては司法研究科クレーム・コミッティが対応することとしている。2011年度の成績評価に対する異議申立ては春学期・秋学期通じて43件、司法研究科クレーム・コミッティが対応したものは1件である。2012年度春学期の異議申立ては15件であり、司法研究科クレーム・コミッティが対応したものはない。

2. 実務家教員と研究者教員との相互研修

実務家教員、研究者教員それぞれの経験・知見を実際に教育に生かすだけでなく、相互研修の場にもなっているのが、「C群基幹科目」中の演習・総合演習科目である。これらの科目は一部を除いて、実務家教員と研究者教員、実体法と手続法のそれぞれの教員による複数の教員で担当されている。このC群科目は、全クラス統一のシラバスで授業が行われていることから、科目毎に教材の作成、内容の検討、授業進行の打合わせのために定期的に、あるいは開講時までには会議を開き、それぞれの課題につき共通の認識を得るよう努めている。

3. 改善された点と今後の検討課題

〔改善された点〕

- (1) 授業に関する中間アンケートや学期末の授業評価アンケートや修了生（司法試験合格者）の意見聴取を授業内容改善につなげる努力が定着しつつある。また、公法、刑事法、民事法の各担当者間で意見交換会等を持つなど、授業内容や改善のための教員間での問題意識の共有も進みつつある。
- (2) 2010年度からは、総合演習科目を選択必修制にした。この改善により、学生自身の判断により、理解不十分な科目を集中的に学ぶことができるようになった。
- (3) 2012年度から、習熟度別クラスが導入された。これにより、学生の理解度に応じた、より丁寧な教育や学習指導が可能となった。
- (4) 傍聴を推奨する授業をあらかじめ教員の出講日にあわせて割り振って設定することで、傍聴の推進を強めた。
- (5) 各科目の「F」評価の基準をFD委員会として検証することで、成績評価の厳格化に対して司法研究科の組織として検証することができた。

〔今後の検討課題〕

- (1) FD活動の中で明らかになった具体的な問題点を教育内容の改善に活かすための工夫がどうできるのか、FD委員会と教育推進委員会との連携のもとに引き続き検討を重ねることが必要である。
- (2) 授業傍聴や外部のセミナー、シンポジウムに参加する等して授業内容改善に役立つ積極性が望まれるが、この点でのFD委員会による一層の工夫が期待される。

- (3) 共通的到達目標に基づく、授業内容等が確実に実施されているかどうか見守っていく必要がある。
- (4) 2012年度に習熟度別クラスが導入されたが、その効果や問題点を適宜、検証する必要がある。そのうえで問題点については早期の対応が必要となる。
- (5) 習熟度別クラス編成方法について、2013年度より判定対象となる期間を拡大することになった。この変更についての検証を次年度以降も継続して行う必要がある。
- (6) 授業内容改善についての学生からの要望にどう対応するのか・対応したかが当該学生に見えるようにする等、学生との信頼関係をより強くする工夫が引き続き求められる。

第6章 入学者選抜等

1. 入学者受入

〔実施体制〕

入学試験は、本法科大学院の専任教員の協力の下に実施されているが、中心になるのは、「司法研究科入試実行委員会」である。委員会は、教授会で決定した次年度の入学試験要項に基づいて、当該入学試験の実施・運営に関する業務及び合否判定原案の検討に関する業務等を厳格に行っている。なお、委員会は、研究科長、教務主任及び研究主任を中心に構成されている。

〔アドミッション・ポリシー〕

本法科大学院は、公平性・開放性・多様性を重視し、「良心教育」「国際性」「高度の専門性」の3つを柱とする教育理念に基づいて、豊かな人間性や感受性、幅広い教養と専門的知識、柔軟な思考力、説得・交渉の能力等の基本的資質に加え、社会や人間関係に対する洞察力、人権感覚、先端的法分野や外国法の知見、国際的視野と語学力を身に付けることにより、わが国の司法を担う法曹として活躍しようという強い意志を持つ人材を受け入れるため、アドミッション・ポリシーを設定し、広く公表している。

本法科大学院では、このアドミッション・ポリシーに照らし、厳格な基準の下で入学者を選抜している。

なお、学内推薦制度は有しない。

〔入学者選抜方法〕

2012年度入学試験は、以下の改正を行ったうえで実施した。

- (1) 第1次審査、第2次審査という2段階の入試方式を廃止した。これに伴い、受験料も従来の35,000円から25,000円に減額した。
- (2) 法科大学院適性試験の成績が同試験総受験者の下位から15%未満の者には出願資格を認めないこととした。なお、出願可能なボーダーにあたる点数は、本法科大学院のウェブページで公開した。
- (3) 日本国内の法科大学院を修了し、「法務博士（専門職）」の学位を有する者には出願資格を認めないこととした。

〔自己アピールシート及び各種の能力・資格について〕

入学者選抜において多様な知識又は経験を有する者を入学させるための措置として、未修者については、筆記試験（小論文）の成績、適性試験の成績、学業成績を中心に、自己アピールシート、語学能力・資格、法律以外の専門能力・資格、職務経歴も参考にして、総合的に合否判定を行っている。また、既修者については、筆記試験（法律科目試験）の成績を中心に、学業成績、自己アピールシート、語学能力・資格、法律以外の専門能力・資格、法律に関する専門能力・資格等も参考にして、総合的に合否判定を行っている。筆記試験の成績だけでなく、自己アピールシートを含む出願書類及び各種の能力・資格についても参考にした総合判定とすることで、志願者の特徴的な能力・経歴を考慮した選抜ができると考えている。

〔社会人〕

社会人等については、自己アピールシートに記載された法律以外の専門能力・資格、職務経歴、語学能力・資格等に基づいて多様な実務経験及び社会経験等を適切に評価している。

本法科大学院では、法学部以外の学部・研究科の出身者や社会人（本法科大学院では、「入学時に大学（大学院等を含む。）卒業後3年以上経過している者」をいう。）も積極的に受け入れるとの方針の下、他学部出身者及び社会人の占める割合が3割以上となるよう努めている。入学者のうち法学部以外の学部・研究科の出身者及び社会人の占める割合は、2012年度は25.9%である。

〔2012年度入学試験結果〕

2012年度入学試験結果（2012年4月入学者）は、以下のとおりである。

- 募集人数 120人（法学未修者40人、法学既修者80人を目安）
- 志願者数 543人（A方式 80人、B方式293人、C方式170人）
- 受験者数 484人（A方式 73人、B方式260人、C方式151人）
- 合格者数 242人（法学未修者75人、法学既修者167人）

なお、追加合格は行っていない。

- 入学者数 54人（法学未修者20人、法学既修者34人）

■入学者の内訳

		法学未修者	法学既修者	全体
入学者数		20	34	54
性別	男性	12	26	38
	女性	8	8	16
社会人		2	3	5
出身学部	法学部	15	29	44
	法学部以外の文系	4	5	9
	理系	0	0	0
	その他	1	0	1
平均年齢		24.1	24.0	24.0

■入学者の出身大学

同志社大学	17	立命館大学	4	大阪市立大学	2	その他	11
京都大学	6	中央大学	3	関西大学	2		
早稲田大学	4	神戸大学	3	龍谷大学	2		

2. 収容定員と在籍者数

本法科大学院の入学定員は、2009年度までは150人、2010年度より120人とし、2012年5月1日現在の在籍学生数は208人である。

入学者数が所定の入学定員と乖離しないようにするため、追加合格の制度を設けている

が、2010年度入試以降は、実施していない。過去5年間の入学者数及び5月1日現在の在籍者数と休学者各数は、以下のとおりである。

	入学者数	在籍者数（うち休学者数）
2008年度	151人	355人（14人）
2009年度	136人	341人（17人）
2010年度	114人	318人（22人）
2011年度	93人	254人（11人）
2012年度	54人	208人（15人）

3. 改善された点と今後の検討課題

〔改善された点〕

2013年度入学試験においては、他大学法科大学院在学中の者を対象として、転入学試験を実施することとしている。

〔今後の検討課題〕

- (1) 志願者数が激減している状況のなかで、優秀な法曹となる資質を備えた学生を選抜するために、入学試験の成績と入学後の学業成績、修了後の司法試験の結果との相関関係を踏まえたうえでの、抜本的な入試制度改革を行うことが急務であるとの認識のもと、法曹養成制度としての法科大学院をとりまく環境を注視しながら、実質競争倍率2倍を超えるように、継続的な見直し作業や入試制度改革が不可欠である。
- (2) 志願者数が激減している状況のなかで、より多くの優秀な法曹となる資質を備えた学生を選抜するための入学試験の実施方法の検討が不可欠である。
- (3) 優秀な法曹となる資質を備えた学生を選抜するための、また多様な知識及び経験を有する他学部出身者及び社会人を受け入れるための方策を検討しなければならない。

第7章 学生の支援体制

1. 学習支援

〔新入生向けオリエンテーション等〕

2012年度入学者に対する履修指導は、4月1日（日）、2日（月）の2日間実施した。4月1日（日）は、研究科紹介、施設説明に引き続いて、入学者を法学未修者と法学既修者に分け、教務担当教員が履修指導をするとともに、科目担当者が必修科目に関する説明を行った。またその後、選択科目について、科目担当者が順番に履修指導を行う場が設けられた。それとは別に、各科目担当者が、研究室での面談等任意の方法で、学生の履修相談に個別に応じる態勢もとられた。

4月2日（月）には、在学生の協力を得て「履修に関する個別相談」も行われた。選択科目説明会、選択科目個別相談、履修に関する個別相談は、新入生だけでなく2年次生及び3年次生も対象にして行われている。

4月5日（木）にはオンライン・データベース講習会が行われた。

なお、履修指導、教育上の指導は、年度の途中でも、必要に応じて行われている。

ガイダンス、履修指導に合わせて講演会も企画し、4月3日（火）「学修上のスタンスについて」（森田章氏：司法研究科教授）と題する講演が行われた。

〔入学予定者向けガイダンス等〕

2013年度入試合格者（2013年4月入学予定者）向けガイダンスを、2012年10月13日（土）午後に開催し、本法科大学院における学修のイメージ、各科目担当者からの説明、入門ゼミ、修了生による座談会、個別相談会等を行った。

2013年4月入学予定者向けガイダンス（第2次入学手続き者対象）を、2013年1月12日（土）、13日（日）の2日間にわたって同志社びわこリトリートセンターで開催した。これは、入学予定者の中の希望者と教員とで一泊の合宿を行う形式のものである。入学予定者20人（未修者6人、既修者14人）に加え、教員12人、職員3人、修了生（弁護士）4人が参加した。合宿では、基本科目の導入講義、修了生との座談会等が行われた。

〔オフィス・アワー等〕

教員と学生との間のコミュニケーションを図るために、専任教員については全教員がオフィス・アワーを設け、日時、面談方法を学生に周知して、勉学等の相談に応じている。

担当者の裁量によるものであるが、オフィス・アワーとは別枠で個別面談の場を設けて各学生のニーズにあった丁寧な指導が推進されつつある。

〔指導教授制〕

2010年度から学生が希望する教員を選択できる指導教授制度を導入し、学生のニーズや習熟度に応じたきめ細かな指導を行っている。2012年度は、専任教員27人が指導教授になり、166人の学生（全学生の79.8%）を指導している。

各学期の学業成績不良者に対しては、指導教授（指導教授を選択していない者は教務主任）が面接し、個別指導を行っている。

〔学習指導〕

指導学生の実情に応じたきめ細かい指導を行い、学生の学力向上を図ることを目的として、2010年度より「学習指導」が新設された。2011年度からは「1学期に90分1コマを15回実施する学習指導」は授業義務時間にも算入されることになった。

「学習指導」を行うか否か、担当する場合の指導の具体的内容をどうするかは各教員の判断に委ねられており、「学習指導」に対する学生の出席も自由である（出席は義務ではない）。

〔教育補助等〕

若手弁護士がアカデミック・アドバイザー（AA）という名称でゼミ形式での学習指導を担当している。AAは、2012年度は36人である。

さらに、メディア・サポーター1人を定期的に配置し、情報機器の操作や情報検索の支援・相談に応じている。

2. 生活支援等

〔経済的支援〕

本法科大学院独自に、授業料相当額給付制の奨学金制度を設けており、2012年度入学生から対象人数を増加した。その結果、授業料相当額の給付を受けられる者は1、2年次各9人、3年次3人、授業料相当額の半額の給付を受けられる者は1、2年次各36人（2011年度は15人）、3年次12人（2011年度は5人）となった。さらに、学費の支弁に支障のある学生に対して授業料相当額を限度とする貸与奨学金制度も設けている。この貸与奨学金は無利息であり、原則として希望者全員に貸与が可能ないように予算的措置を講じている。これらの奨学金制度は、入学試験要項や本法科大学院パンフレット、本法科大学院ウェブサイトにもその概要を掲載している。また、2012年度入学生より、本学出身者（3年次飛び入学者を含む）に対して入学後に入学金相当額を給付する「司法研究科特別支給奨学金」も新設している。

本学法学部出身者で法学既修者として入学する者のうち、学業成績及び入試成績が優秀なものに対して入学後2年間の学費を免除する「司法研究科特別奨学金」は、2012年度入学生より廃止している。

奨学金をはじめとする学生生活の支援は、大学全体の組織である学生支援センターが行っている。

学生の健康面については、本法科大学院のある建物内に保健センターがある。同センターは月曜日から金曜日までの定められた時間帯に診療を行っており、学生については、受診者に代わって大学が医療費（保険診療分の内自己負担分）を同センターに支払うことになっている。なお、同センターは学生健康診断も毎年1回実施している。

〔学生相談〕

学生相談のための大学全体の組織として、カウンセリングセンターがある。本法科大学院の学生に特有の問題に関する生活相談については、教務主任（学生担当）と、学生支援委員会が担当している。前述の指導教授や学生の希望する教員も適宜相談に応じており、事務室が相談に応じることもある。なお、相談を受けた場合は、学生のプライバシーに配

慮しながら、学内の関係部課とも連携をとり、対応している。キャンパス・ハラスメントについては、「同志社大学キャンパス・ハラスメント防止に関する内規」、「同志社大学キャンパス・ハラスメント防止のためのガイドライン」に従い、相談員が配置されている。「キャンパス・ハラスメント防止のために」というタイトルでパンフレットを作成し、学生をはじめとする本学の全ての構成員に対して、キャンパス・ハラスメント防止のためのガイドラインやそのための内規を周知している。

3. 障がいのある学生に対する支援

障がいのある学生から受験の希望が出された場合には、これまでのところ全て対応することができている。不合格あるいは入学辞退等により現在障がいのある学生は在籍していないが、入学者がある場合、必要とされる学習支援をする用意をしている。

また、全学的な組織の学生支援センターでは、障がい学生支援室を設けており、各学部・研究科と連携をとりながら障がいのある学生へのサポートを行っている。

4. 意見聴取・親睦

年に2回程度、教員と学生との交流茶話会を行い、軽食を取りながらフランクに学生の意見を聞く機会を設けている。

5. 修了状況

各年度の修了状況の推移は以下のとおりである。

司法試験に出願する以外の者は国家公務員，地方公務員，企業法務関係等に進む者や，旧司法試験に合格した者がいる。

2005年度修了者 91人
うち標準年限内に修了した者の数 91人 修了率 95.8%
【内訳】
2004年度入学生法学既修者 95人中91人修了 修了率 95.8%
2006年度修了者 132人
うち標準年限内に修了した者の数 131人 修了率 82.4%
【内訳】
2004年度入学生法学未修者 61人中43人修了 修了率 70.5%
2005年度入学生法学既修者 98人中88人修了 修了率 89.8%
2007年度修了者 145人
うち標準年限内に修了した者の数 134人 修了率 87.6%
【内訳】
2005年度入学生法学未修者 60人中49人修了 修了率 81.7%
2006年度入学生法学既修者 93人中85人修了 修了率 91.4%
2008年度修了者 140人
うち標準年限内に修了した者の数 125人 修了率 82.8%
【内訳】
2006年度入学生法学未修者 61人中40人修了 修了率 65.6%
2007年度入学生法学既修者 90人中85人修了 修了率 94.4%
2009年度修了者 123人
うち標準年限内に修了した者の数 116人 修了率 79.5%
【内訳】
2007年度入学生法学未修者 43人中31人修了 修了率 72.1%
2008年度入学生法学既修者 103人中85人修了 修了率 82.5%
2010年度修了者 146人
うち標準年限内に修了した者の数 119人 修了率 83.8%
【内訳】
2008年度入学生法学未修者 48人中40人修了 修了率 83.3%
2009年度入学生法学既修者 94人中79人修了 修了率 84.0%
2011年度修了者 92人
うち標準年限内に修了した者の数 83人 修了率 74.1%
【内訳】
2009年度入学生法学未修者 42人中25人修了 修了率 59.5%
2010年度入学生法学既修者 70人中58人修了 修了率 82.9%

※修了率は，入学者に対し，標準修了年限で修了した者が占める率

6. 司法試験合格者

本法科大学院の修了生で、司法試験に合格した者は、2006年度35人、2007年度57人、2008年度59人、2009年度45人、2010年度55人、2011年度65人、2012年度44人である。

2006年度の合格者の内2人が裁判官、2人が検察官に、2007年度の合格者の内1人が裁判官に、2人が検察官に、2008年度の合格者の内1人が裁判官、2人が検察官に、2009年度の合格者の内1人が裁判官、2010年度の合格者の内2人が裁判官、3人が検察官に、それぞれ任官した。

また、本法科大学院の特色の一つである「国際性」を生かし、弁護士希望の修了生の中で外資系法律事務所に就職した者もいる。

7. 職業支援（キャリア支援）

〔これまでの経過〕

2007年度からは、希望する修了生から自己紹介書の提出を受け、本法科大学院教員等の関係者の閲覧に供し、同志社諸学校出身の法曹からなる「同志社法曹会」にも情報を提供している。また、大学主催で行われる企業との就職懇談会（大阪）に就職委員が参加して、採用の働きかけをしている。企業等からの求人募集や就職説明会の案内があった場合には、掲示等により学生に周知している。さらに、企業等が就職関係の説明会の開催を申し入れた場合には、会場を提供するなどをして積極的に対応している。2012年9月19日には、企業の第一線で法務部門を担当されている方を招いて「企業法務に関する説明会」を開催し、約30人が出席した。

本法科大学院修了生の組織である「寒梅会」や実務家教員の協力を得て、適時、就職説明会や就職座談会、講演会等を開催するなど、学生の法曹としてのキャリア設計を促す機会を設けている。

このほか、明治大学を中心とする12大学の法科大学院と共同で、2007年度文部科学省専門職大学院等教育推進プログラムに採択された「全国法曹キャリア支援プラットフォーム」プロジェクトに取り組んだ結果、ウェブサイトは、2008年5月から本格的に稼働し、6月中旬からは求人情報が公開され、本法科大学院修了生、在学生も利用している。《「ジュリナビ」ウェブサイト〔<https://www.jurinavi.com/>〕参照》

〔司法研究科就職支援チーム〕

司法試験に合格することが厳しい状況を迎える中で、学生のキャリア支援を強化するため、2009年10月に、本法科大学院に司法研究科就職支援チームを設置し、専属の職員（非常勤嘱託）を配置して、法律事務所の採用情報収集、民間企業の法務職採用情報収集、修了生の就職先の開拓、交渉、就職相談対応等を行っている。求人開拓を行った企業は約100社にのぼる。

設置後約3年間で計132人、延べ694回の相談があり、うち50人の就職が決定もしくは内定している。就職先は一般企業や官庁など多方面に及んでいる。

〔サーティフィケーション・システム〕

修了生に対して、就職活動に活用できるよう、修了時における成績に基づいて、次の

基準により成績優秀者に証明書を発行している。

- (1) 全科目の総合成績GPA20%以内の該当者に「極めて優秀」もしくは「優秀」であることを示す証明書。
- (2) 本法科大学院が定める特定の専門分野のGPA3.3以上の該当者に「極めて優秀」もしくは「優秀」であることを示す証明書。

8. 改善された点と今後の検討課題

〔改善された点〕

- (1) 学習支援の一環としての導入教育の実施回数が拡充され、内容の工夫も進んでいる。2012年度については、2～3月に計3日間16講義を実施した。
- (2) 入学予定者を対象にした合宿形式のオリエンテーションは参加者の評判もよく、定例化している。
- (3) 学生の生活や学習の相談に対応するための「学生の選択制による指導教授制度」が定着した。
- (4) 司法試験の不合格者等、修了生の進路にはとりわけ厳しいものがある状況の中で、就職支援チームを中心にして学生の進路を切り拓く活動が強化されてきており、また同チームに対する学生の信頼も強まってきている。
- (5) 給付奨学金の受給対象人数を拡充した。
- (6) 2013年度入学生から、新たに2年間継続給付の奨学金（第1種奨学金）を新設する。

〔今後の検討課題〕

- (1) 2012年10月に実施した2013年度入試合格者向けガイダンスの出席者数は33人で、昨年度41人に比べ減少している。ガイダンスの実効性をさらに高めるためにも、より多くの合格者に参加してもらう工夫が必要である。
- (2) オフィス・アワー、指導教授制度等の教員による学生支援は確実に前進しているが、勉学面にとどまらない学生生活全般についてのよりきめ細かい個別指導ができるよう、一層の検討と努力が必要である。
- (3) 本法科大学院の建物自体が学生の生活拠点となっている現状を踏まえ、学生主任（教員）制度の導入の検討や職員の加配が必要である。
- (4) 法科大学院を取り巻く極めて厳しい状況がある中で、学生がこの状況を認識して、法曹としての進路あるいはそれ以外の進路についてしっかりとした方針を持って勉学に励むよう、あるいは社会人としての常識等を身につけるよう指導を強めることが求められる。

第8章 教員組織

1. 教員の資格と評価

〔教員の評価等〕

本法科大学院には、2013年1月31日現在、専任教員33人（みなし専任1人を含む）、兼任教員（本学法学部など本学教員に対する兼担委嘱により任用される教員）9人、兼任教員（他大学の教員、法曹関係者その他の適任者に対して、嘱託講師としての科目担当委嘱により任用される教員や客員教員として任用される教員等）42人がいる。2012年度の本法科大学院の入学定員は120人であり、設置基準上必要とされる専任教員数は24人であるが、それよりも9人多い。

専任教員中の研究者教員24人はそれぞれの専攻分野について教育上又は研究上の業績を有しており、みなし専任を含む実務家教員の9人は特に優れた知識及び経験を有している。また、全員がその担当する専門分野について教育上の高度の指導能力があると認められる者である。

〔教員の採用・昇進〕

教員の採用・昇進に係る手続の透明性を高め、法科大学院教育にふさわしい教員を採用できるようにするため、「司法研究科教員の採用・昇任等の手続に関する規則」が2010年1月27日の教授会において新たに制定され、これに連動して「司法研究科教授会における人件審議に関する内規」が廃止された。同日の教授会では「司法研究科人事委員会規則」も制定され、教授会のもとに人事委員会を置き、中長期の教員人事計画について検討を重ね、また本法科大学院教員全員に各々の専門分野外の人事案件についても推薦権を認める等して具体的に人事を進めるための作業が行われた。

また、本学法学部・法学研究科教員が本法科大学院教員として任用される場合を想定し、関係規則の一部を改正し、「法学部教員の司法研究科への移籍に関する特則」を設けた。

兼任教員の委嘱は、「司法研究科教授会における客員教員・嘱託講師の任用・委嘱に関する内規」の定める手続に従って行われており、研究業績、教育経験を教授会において審査し決定している。兼任教員についても、研究業績、教育経験を教授会において審査し、決定している。

客員教員の任用については、「同志社大学客員教員規程」が適用され、客員教員のうち客員教員A、同B、同Cの場合の本法科大学院内の手続は、「司法研究科教授会における客員教員・嘱託講師の任用・委嘱に関する内規」が適用される。客員教員のうち特別客員教授の場合は、「司法研究科教員の採用・承認等の手続に関する規則」にもとづき、研究科内においては専任教員に準じた手続がなされる。

2. 教員の配置と構成

〔専任教員の構成〕

専任教員33人の構成は、以下の表のとおりである。

表1

(2013年1月31日現在)

専攻	収容定員	在籍学生数(a)	設置基準必要教員数*		専任教員(b)									みなし専任			在籍学生数(a)／専任教員数(b)	
			実務家教員**	みなし専任***	教授	准教授	講師	合計	実務家教員(内数)			実務家教員						
									教授	准教授	講師	合計	教授	准教授	講師	合計		
法務	360	198	24	24	3以内	30	2	0	32	8	0	0	8	0	0	1	1	6.19

* 設置基準必要教員数の内半数は教授でなければならない。

** 専攻分野におけるおおむね5年以上の実務の経験を有し、かつ高度の実務の能力を有する者。

***実務家教員の一部は、専任教員以外のものであっても、1年につき6単位以上の授業を担当とし、かつ、教育課程の編成その他の専門職学位課程を置く組織の運営について責任を担う者で足る。

〔全教員の構成〕

兼任教員、兼任教員を含む全教員の構成は以下の表のとおりである。

表2

				人数	小計	合計
専任	専	専任教員		24	33	84
	実・専	実務家・専任教員	元裁判官	2		
			元検察官	1		
			弁護士	2		
			外国の弁護士	1		
			元公正取引委員会	1		
			元特許庁 弁理士	1		
専・他	専任ではあるが、他の学部・大学院の専任教員		0			
実・み	実務家・みなし専任教員		1	1		
兼任	研究者		9	9		
兼任	研究者		14	42		
	実務家	派遣裁判官	2			
		派遣検察官	1			
		弁護士	23			
		その他	2			

〔専任教員の所属など〕

本法科大学院と本学法学部・法学研究科とに所属する専任教員（いわゆるダブルカウント教員：上記表2の中の専・他）については、2011年度からその二重所属を解消した。

〔専任教員の年齢構成等〕

みなし専任を除く専任教員32人中30人が教授であり2人が准教授である。その内1人は女性教員である。2013年1月31日現在の専任教員32人の年齢構成は、30代が1人、40代が8人、50代が8人、60代が15人である。平均年齢は56.81歳である。

3. 実務家教員

上記表2のとおり、2012年度は、専任教員中実務家教員は9人であり、その内1人はみなし専任教員であり、弁護士である。みなし専任教員以外の実務家教員8人の内2人は裁判官として、1人は検察官として日本の法曹実務の経験を有し、1人は米国ニューヨーク州及びグアム地域における弁護士として実務の経験を有し、1人は公正取引委員会の事務局長として実務の経験を有し、そして1人は特許庁の部門長審判長、審査部長、弁理士として実務の経験を有している。専任教員中の2割以上が実務家教員でなければならないという基準や置くことができるみなし専任教員数の基準の双方を満たしている。

4. 科目配置

〔科目毎の教員配置〕

2012年度は、本法科大学院の専任教員、兼任教員、兼任教員の科目別配置は、以下の表のとおりである。法律基本科目については、憲法2人、行政法2人、民法7人、商法5人、民事訴訟法3人、刑法3人、刑事訴訟法3人と、いずれの科目についても、当該科目を適切に指導できる複数の専任教員を置いている。

表3

		専任			兼担	兼任		計
		研究者	実務家	みなし		研究者	実務家	
法律基本科目	憲法	2						2
	行政法	2					1	3
	民法	6	1		1	3	12	23
	商法	4	1		1	1	2	9
	民事訴訟法	3			1	1		5
	刑法	2	1					3
	刑事訴訟法	1	2			1	1	5
法律実務 基礎科目	5	4	1			12	22	
基礎法学・隣接科目	1			3	1		5	
外国法科目	3	1			4	1	9	
展開・先端科目	9	4		3	4	5	25	

*この表の「法律基本科目」とはA群基礎科目及びC群基幹科目、「法律実務 基礎科目」とはB群法曹基本科目及びH群実務関連科目、「基礎法学・隣接科目」とはG群科目、外国法科目とはF群科目、「展開・先端科目」とはD群科目及びE群科目のことである。

*科目別に延べ人数としてカウントしている。

〔必修科目〕

本法科大学院が教育上主要と認められる授業科目は、「基礎科目」、「法曹基本科目」、「基幹科目」に必修科目として担当している。

2012年度は、必修の「基礎科目」は17科目、17クラスを開講している。この内15クラスは専任教員が担当者に加わり、1クラスは兼任教員が、1クラスは兼任教員が担当している。

必修の「法曹基本科目」は3科目、9クラスを開講している。全てのクラスについて、担当者には専任教員が加わっている。

必修の「基幹科目」は11科目、55クラスを開講している。この内48クラスは専任教員が担当者に加わり、4クラスは兼任教員が、3クラスは兼任教員が担当している。

選択必修の「基幹科目」は7科目、32クラスを開講している。全てのクラスについて、担当者には専任教員が加わっている。

〔専任教員のクラス担当比率〕

以上113クラスの内92%に当たる104クラスは担当者に専任教員が加わっている。必修科目の中には複数の教員が担当する科目があるが、当該授業科目の内容・実施・成績評価については専任教員が責任を持っている。

〔科目配置の特色〕

本法科大学院の教育理念となる3本の柱は、「良心教育」、「国際性」、「高度の専門性」である。特に、基礎法、外国法の科目を多数設置することで、豊かな人間性や洞察力を涵養し、国際的な広い視野を身に付けさせることに努めている。また、渉外法務に強い法曹を養成するため、9人の教員が外国法科目を、3人の教員が国際関係法科目を担当している。高度の専門技能を備えた法曹を養成するため、25人の教員が何らかの展開・先端科目を担当して、多様なニーズに応える態勢を採っている。ここで言う教員には、専任・兼担・兼任教員が含まれている。

5. 研究環境

〔担当単位数〕

専任教員の担当単位数は、以下の表5、6のとおりであり、30単位以上授業を担当している教員は、存在していない。

表5、6

単位 \ 年度	2008	2009	2010	2011	2012
20 未満	15	14	13	20	22
20 以上 25 未満	12	14	16	9	10
25 以上 30 未満	5	5	3	2	0
30 以上	0	0	0	0	0
計	32	33	32	31	32
単位 \ 年度	2008	2009	2010	2011	2012
20 未満	14	11	11	19	21
20 以上 25 未満	13	16	18	10	10
25 以上 30 未満	5	6	3	2	1
30 以上	0	0	0	0	0
計	32	33	32	31	32

〔在外研究・国内研究〕

本法科大学院の専任教員（みなし専任教員は除く）は、「同志社在外研究員規程」、「同志社大学在外研究員内規」、「同志社大学国内研究員規程」に基づいて、在外研究や国内研究を申請することができる。2011年度～2012年度にかけての在外研究者・国内研究者は以下のとおりであるが、授業や学内委員等の負担により、長期の研究専念期間を確保することが困難な状況にある教員もいる。

表 7

研究専念期間利用実績及び 2013 年度予定		
	研究専念期間	滞在先
Colin P.A. Jones	2010年8月21日～2011年8月2日	University of Victoria (カナダ) University of Cambridge (イギリス)
竹中 勲	2010年10月15日～2011年10月15日	ステッツオン大学ロースクール (アメリカ)
木下 孝治	2012年8月23日～2014年8月22日	フランクフルト大学法学部・保険法研究所 (ドイツ)
奥村 正雄	2013年4月1日～2013年7月15日	オックスフォード大学法学部 (イギリス)
森田 章	2012年9月20日～2013年9月19日	国内研究
古江 頼隆	2013年9月24日～2014年9月23日	国内研究

〔事務体制〕

本法科大学院には、事務長を含む4人の専任職員がいる。ほかに10人の契約職員等がいて、教材作成補助・印刷業務、庶務関連業務、国際教育関連業務、教員の個人研究費支出に係る事務処理業務、本法科大学院図書室の図書資料受入関係業務等を担当している。また、図書室のカウンター業務等は、業務委託により、6人の職員がレファレンス・ライブラリアンとして専任教員を含む利用者からの質問に対応している。

以上の職員は全て専任教員の教育上及び研究上の職務を補助するための適切な資質及び能力を有している。

〔教育補助〕

本法科大学院では、「ティーチング・アシスタントに関する内規」に基づいて、本学の法学研究科博士前期課程・後期課程等の学生をティーチング・アシスタントとして任用している。ティーチング・アシスタント（TA）は、授業教材の準備や演習の運営補助、学習上の指導・相談などの教育補助業務を行っている。また、本学の学生の中から、授業補助のみを行うものとして、スチューデント・アシスタント（SA）も任用している。年度毎の任用数は、以下の表のとおりである。

なお、TA・SAとは別個に、「修了生による授業補助」として修了生がSA業務を担当するケースもある。

表 8

	ティーチング・ アシスタント (D)	ティーチング・ アシスタント (M)	スチューデント・ アシスタント
2004 年度	9 人	0 人	—
2005 年度	5 人	9 人	16 人
2006 年度	12 人	10 人	17 人
2007 年度	8 人	16 人	16 人
2008 年度	9 人	22 人	13 人
2009 年度	6 人	26 人	11 人
2010 年度	5 人	28 人	6 人
2011 年度	3 人	18 人	4 人
2012 年度	6 人	21 人	5 人

* 表中の (D) は大学院博士後期課程の大学院生, (M) は同前期課程及び同専門職学位課程の大学院生

6. 改善された点と今後の検討課題

〔改善された点〕

- (1) 2010年度に新設された人事委員会を中心にして、全司法研究科教員が全ての分野の教員人事に責任を持つという観点から具体的に人事が進められることで、人事に関する透明度が高まった。
- (2) 定年延長に係る人事手続を手直しし透明性を高めた。
- (3) 学内の制度変更により、2012年度から5年間に本法科大学院から6人を在外研究に派遣できる枠ができ、専任教員が研究専念期間を申請できる流れができつつある。
- (4) 学生の質問に答える等、学生指導の負担が極めて大きい中で、それら学生指導の負担を、1学期に15回実施する「学習指導」は、就業規則上の授業担当時間に算入することで教員の負担を軽減できる道筋が拓かれた。これは、本法科大学院立ち上げの時から念願とされていたことである。
- (5) 一人の教員が本法科大学院と法学部の二つの教員組織に同時に所属するいわゆる教員のダブルカウント状態が該当教員全員についてようやく2011年4月から解消された。そのことで、該当教員はそれぞれの所属組織でその所属組織にのみ責任を持って職務に専念できることになり、また、特に教員人事について本法科大学院としての将来計画に見通しを持つことができるようになった。

〔今後の検討課題〕

- (1) 教員の教育、研究環境の整備・改善のために何が必要であるのかについて本学法学部・法学研究科の協力も求め今後とも真剣に検討を深め、質の高い教育を行いながら研究にも力を入れることができるようにしていくことが求められる。
- (2) 本法科大学院の将来を担う後継者教員の養成の問題について検討を進めることが求められる。
- (3) 補充人事等人材の確保が各分野について困難な状況になっており、長期的な展望で

人事計画を立てる等その対処法について継続的に検討することが必要である。

第9章 管理運営等

1. 管理運営の独自性

〔教授会等〕

「同志社大学専門職大学院学則」第46条第1項に基づき、本法科大学院の運営に関する重要事項を審議する教員組織として、司法研究科教授会（以下、「教授会」という。）が置かれている。教授会の組織及び運営に関する事項は、同学則第46条第4項の委任に基づき、「同志社大学大学院司法研究科教授会規則」に定められている。教授会の構成員は、本法科大学院の専任教員のほか、特別客員教授も含む。教授会には、事務職員（事務長・係長）も陪席する。

「司法研究科教授会規則」第3条第5項（「研究科長は、必要に応じて構成員以外の教員を教授会に出席させることができる。ただし、この教員は議決には参加できない。」）に基づき、みなし専任教員に対しても教授会の開催を通知している。欠席したみなし専任教員には、当日配付された資料を手元に届ける。教授会の定例会議は、月1～2回であり、他に、臨時会議を開催することがある。

みなし専任教員を含む全ての専任教員は教育推進会議の構成員であり、教育課程の編成については、この会議でも懇談している。

教授会、嘱託教員を含む教育推進会議において、本法科大学院の教育活動等に関わる教員は自由に意見を述べることができ、教育課程の編成等について責任を分担している。但し、みなし教員は、教員の人事案件等について投票権は認められていない。

〔研究科長等〕

「同志社大学専門職大学院学則」第47条に基づき、本法科大学院には、司法研究科長が置かれている。研究科長は、「同志社大学大学院司法研究科役職者に関する内規」に基づいて、教授会の場において専任教員から無記名投票によって選出される。任期は1年である。研究科長は教授会を招集し、主宰する。

執行部は、規則に明文化されてはいないが、当研究科において慣例上確立された組織であり、「司法研究科役職者に関する内規」に定められた役職者（研究科長、副研究科長（主任の1人が兼任）、教務主任4人、研究主任1人）によって構成されている。執行部は毎週水曜日に定例会議を開催し、教育研究活動に関する事項全般についてその方針を策定の上、教授会へ報告・提案している。事務長、係長が必要な資料等を用意して執行部定例会議に陪席し、同会議の運営を支えている。

〔各種委員会〕

本法科大学院に設置されている委員会等は、教育推進委員会、企画・広報委員会、国際交流委員会、研究教育環境委員会、FD委員会、自己点検・評価委員会、学生支援委員会、人事委員会、アカデミック・アドバイザー担当、エクスターンシップ担当、司法研究科クレーム・コミッティ、法教育に関する学外団体の調整担当である。

専任教員は、いずれかの委員を担当することとし、執行部及び他の委員会との連携を図りながら、それぞれの分掌事項の企画、検討、処理を行っている。

〔本法科大学院の自律性〕

本学の大学評議会は、学長、副学長、各学部長・研究科長、各学部等で選出された教員及び事務局長で構成される、本学の最高意思決定機関である。学則改正を伴う教育課程の改正、教員の採用人事・昇任人事等については、この大学評議会での承認を得ることが必要であるが、同評議会は、各学部・研究科の教育・研究活動に関する重要事項について、各教授会における決定内容を尊重した審議を行っている。本法科大学院の教育方法、成績評価、修了認定、入学者選抜といった、法科大学院の独自性の強い項目についても、本法科大学院の教授会の決定内容が尊重されている。学位授与に関する事項は全学的機関である研究科長会の承認事項であるが、ここでも、各研究科教授会の決定が尊重されている。

本法科大学院の運営に係る財政上の事項については、各研究科長も構成員である予算委員会、大学評議会の議を経て決定されるが、本法科大学院の意見を聴取する機会が設けられている。具体的には、大学全体の予算策定に当たり、毎年、本法科大学院から必要な予算を要求している。また、研究科長は、大学執行部に対して本法科大学院の運営に係る財政上の事項に関する意見を口頭あるいは文書で上申できる。

〔事務体制〕

本法科大学院の管理運営のための事務体制として、司法研究科事務室を設置している。専任職員は、事務長、庶務・教務係長及び係員2人であり、入試実施を含む教務事務全般、教員・学生との対応、他部課との連絡・調整業務等を担当し、必要に応じて本法科大学院内の各種委員会の会議にも陪席している。

専任職員以外の職員は、教員の個人研究費支出に係る事務処理等を担当する者1人、本法科大学院図書室の図書資料受入関係業務等を担当する者1人、各種伝票処理等の庶務業務を担当する者1人、簡易な内容の学生対応や教材印刷等を担当する者5人、国際交流関係業務を担当する者1人、認証評価やFD関連業務を担当する者1人である。

専任職員は、「同志社大学職員研修内規」による研修制度に参加し、職員としての能力向上に努めている。また、専任職員は、原則として毎週1回会議を開き、連絡、調整、意見交換を行う等、本法科大学院の管理運営が適切に行われるように努めている。

〔予算〕

本学の予算は、毎年度、全学諸機関の長で構成する予算委員会での審議、大学評議会での承認を経て決定される。本法科大学院における教育活動等の予算も、他学部・他研究科と共にこの会議で決定されている。

教員の「個人研究費」、教員用の学術資料購入経費（「研究室学術資料費」）、学生用の学術資料購入経費（「大学院学術資料費」）、本法科大学院教育の運営経費（「大学院教学充実費」）、学生の資料印刷補助経費（「大学院学生印刷費補助」）等は所定の積算基準により算定されるが、本法科大学院の教育活動を適切に実施するため、「大学院教学充実費」について特別加算が行われている。また、毎年度、本法科大学院の教育活動等に関する特別予算措置が認められており、2011年度に続き、2012年度も、通常の間経費以外に特定事業経費が承認されている。

本法科大学院は、「大学院教学充実費」から、授業教材の無料配付、法科大学院生教育研究賠償責任保険の保険料全額大学負担、エクスターンシップ研修料の一部大学負担等の支

出も行っている。

2. 今後の検討課題

執行部を中心とした運営体制は、日常の迅速な対応に資するが、他面、執行部メンバーの負担が過重になりがちな面を否定できない。また、執行部とすべての教員との間における情報の共有化、各分野単位の会議間の連携と活性化等を一層進める必要がある。

第10章 施設、設備及び図書室等

1. 施設

本法科大学院の諸施設は、寒梅館の2階、4階及び5階に配置されている。

〔寒梅館2階〕

寒梅館2階には、講義用教室3室（50人収容、76人収容、118人収容）、演習用教室4室（各30人収容）及び模擬法廷兼用教室1室（50人収容）の8室がある。

講義用教室及び演習用教室は、法科大学院の授業を考慮し、学生席は教卓を中心に馬蹄形ないし扇形に配置している。本学の教室は全て教務部が一括管理しており、寒梅館の教室も例外ではないが、上記の教室は本法科大学院の授業のために優先的に使用することが認められている。本法科大学院が使用しない時間帯における臨時的な使用を除き、上記の教室で、他学部・他研究科の授業等は行われていない。

〔寒梅館4階・5階〕

寒梅館の4階・5階は、本法科大学院の専用フロアであり、本法科大学院が管理・運営を行っている。

4階には、司法研究科事務室、図書室、情報検索室、学生自習室、学生共同研究室、学生用ラウンジがある。学生はLANを使うことにより、学生自習室等から図書室所蔵の図書の検索やオンライン・データベースの利用が可能である。

5階には、教員用個人研究室（36室：専任教員・みなし専任教員・客員教員・派遣裁判官・派遣検察官等が使用）、教員用ラウンジ、講師控室、客員教員室、面談室、教員共同研究室、研究科長室兼応接室、就職支援チーム室、教材印刷室、教員・学生交流ラウンジ、セミナー室（2室）、学生共同研究室、学生談話室、学生自習室がある。

教員と学生の面談は、面談室のほか、教員個人研究室、研究科長室兼応接室、教員・学生交流ラウンジで行うこともできる。

4階・5階の学生自習室には476台のキャレルを設置しており、学生は、1人1台のキャレルを固定席として休・祝日を問わず24時間利用することが可能である。

さらに、キャレル数に余裕があるため、司法試験準備のためにキャレルの使用を希望する修了生には、「司法試験準備生」という制度を設けて、一定の利用料を徴収し、自習室のキャレルを固定席として使用することを認めている。

2. 設備

教員用個人研究室には、執務用机、長机、学生対応用椅子、書架が標準仕様として備え付けられている。必要に応じて書架を増設することも可能であり、PCやプリンタ等、教育・研究に必要な機器については個人研究費（年間49万円）で購入することも可能である。

教室には、固定式のプロジェクターも設置している（模擬法廷兼用教室を除く）。模擬法廷兼用教室には、音声認識による自動編集システムを備えた法廷シーンの撮影設備を設置している。

教室、学生自習室等には、無線LANが整備されているほか、全ての席にPC用情報コ

ンセントと電源コンセントが備えられている。教員用個人研究室，講師控室，客員教員室，面談室にも，PC用情報コンセントが備えられている。

教員は，同志社大学の学修支援システム「DUET」及び e-learning システムである「e-class」を利用することにより，ネットワークを通じて学生に連絡事項を伝えたり，授業の教材を配付したりすることができる。また，学生による効率的な自習を可能にするため，TKC 社提供の「教育研究支援システム」や名古屋大学法科大学院が開発した法的知識理解度確認システム「学ぶ君」も導入している。

3. 図書室

図書室及び情報検索室は，本法科大学院専用である。図書室の座席数は60席，図書室に隣接した情報検索室の座席数は20席である。

〔図書室の職員〕

図書室は，2013年1月31日現在で，6人が閲覧サービス業務を交代で担当している（学外業者への業務委託）。全員が，司書資格を有する者であり，開室時間中は常時資格者が窓口において対応できるようにしている。情報検索応用能力試験2級（サーチャー）や初級システム・アドミニストレータの保有者もいる。また，担当者は研修会や講習会等に積極的に参加し，法情報調査能力の向上に努めている。

〔図書及び資料の所蔵〕

本法科大学院の図書及び資料の所蔵状況は，2013年1月31日現在で，図書約18,600冊（内外国書2,600冊），逐次刊行物約330種，視聴覚資料（憲法教材ビデオ15点・アメリカ法参考DVD18点・辞典CD-ROM等），オンライン・データベース8種（LLI オンライン，TKC ローライブラリー，D1-Law.com, Lexis.com, Westlaw.com, Hein online, Beck-online, Juris online）である。学生は，LLI オンライン，TKC ローライブラリーを含む複数のオンライン・データベースに自宅からもアクセスすることが可能である。

本法科大学院では，研究教育環境委員会を設置し，教員の教育・研究及び学生の学習に必要な図書及び資料を整備するための予算や図書購入の内容等について検討，決定している。また，各教員が，随時，図書室に所蔵すべき図書及び資料を選別し，購入を求めることができる体制も採っている。

専任教員以外の派遣裁判官・派遣検察官についても，図書購入を希望することができる。図書収集等の担当職員は，各教員に対して，新刊図書のリストなど，図書室に所蔵すべき図書及び資料の選別に必要な資料を定期的に提供し，図書購入に関しては，学生からのリクエストも受け付けている。

図書・資料を適切に管理，維持するため，年に1回，蔵書の総点検を実施するとともに，日常的にも点検し，再製本，修理等が必要な場合には，直ちに対応している。開架方式であるため，図書等の配置が正常であるか等の点検も日常業務に組み入れている。また，図書の無断持ち出しを防ぐためBDS（入退館管理システム）も設置している。

〔教員・学生への支援業務〕

図書室・情報検索室の開室時間は、月曜日から金曜日が9時から22時、土曜日と日曜日が9時から18時である。図書室には、開室時間中、レファレンス対応能力のある職員が常駐し、図書の貸出・返却はもちろん、文献・資料の所蔵調査や判例検索、キーワードからの文献情報検索等を短時間でできる体制を確立している。また、改訂版が出た場合には、旧版に目印を貼付するなど、利用に便利なサービスを行っている。

教員に対しては、メールや電話でのレファレンスにも応じている。また、新着雑誌については、申請のある教員に対して10点（本法科大学院所蔵以外の雑誌も含む。）までコンテンツサービス（雑誌目次情報の提供）も行っている。また、新着図書のリストを毎週掲示板に掲示したり、情報誌（「データベース紹介」、「図書室だより」等）を発行するなど、学生・教員に対して有用な情報を提供している。

また、PC35台（内蔵書検索用、CD-ROM閲覧用各1台）とプリンタ2台、コピー機3台を図書室に、PC20台とプリンタ2台を情報検索室に設置している。教員、学生が機器類を操作する際の支援のため、メディア・サポーターが定期的に待機している。

4. 改善された点と今後の検討課題

〔改善された点〕

- (1) TKC社提供の「教育研究支援システム」を新規に導入することにより、授業内容についての教員と学生とのやり取りが、オンラインでできる仕組みが整った。
- (2) 学生の相談を随時受け付ける形のアカデミック・アドバイザー制度が廃止されたことに伴い、従来アカデミック・アドバイザー室であった部屋を新たに客員教員室として整備した。これにより、客員教員室は計3室となった。

〔今後の検討課題〕

- (1) 図書・資料を所蔵するスペースが足りなくなる事態に備えて、図書室スペースを拡充する必要がある。

第11章 自己点検及び評価等

1. 自己点検・評価

本法科大学院における教育活動等の点検・評価について第三者による客観的、多角的視点からの検証を加えるため、2007年から、司法研究科自己点検・評価委員会の特別委員として、法律実務に従事し法科大学院の教育に関し広く高い識見を有する学外者2人（研究者1人、実務家1人）を委嘱している。特別委員からの意見・提言については、その対応を含めて司法研究科自己点検・評価委員会で検討すると共に、学内の改革に反映されるように努めている。

本法科大学院のウェブサイト等でこれまで公表された自己点検・評価報告書は、以下である。

- ・『同志社大学大学院司法研究科（法科大学院）の現況』（自己点検評価の対象期間は、2004年4月～2007年1月）（2007年3月）
- ・『同志社大学大学院司法研究科（法科大学院）の現状と課題—自己点検・評価報告書 2009年2月～2010年3月—』（2010年3月）
- ・『同志社大学大学院司法研究科（法科大学院）の現状と課題—自己点検・評価報告書 2010年4月～2011年3月—』（2011年3月）
- ・『同志社大学大学院司法研究科（法科大学院）の現状と課題—自己点検・評価報告書 2011年4月～2012年3月—』（2012年3月）

本法科大学院は、大学評価・学位授与機構による認証評価を受けるために2008年6月に『法科大学院認証評価 自己評価書』を同機構に提出したが「再評価」試験を実施していることを理由として「不適合」との評価を受けた。しかし、2009年6月に追評価申請を行い、2010年3月には「適合」の評価を受けた。

なお、大学評価・学位授与機構の基準ないし解釈指針の改定に伴い、2011年1月12日の教授会において、「司法研究科自己点検・評価委員会規則」を改正した。改正内容は、自己点検・評価項目として第11章（自己点検及び評価等）を旧第9章（管理運営等）から独立させ、あわせて、上記の報告書の作成を毎年行うべき旨規則に明記したものである。

また、2012年度より特別顧問制度を設けて、外部の有識者2名を委嘱して、より積極的な自己評価に役立てている。

2. 情報の公表

本法科大学院及び同志社大学、学校法人同志社では、教育活動等の状況について、毎年度、印刷物の刊行やウェブサイトに掲載することにより、受験生のみならず社会一般に広く周知を図れるよう、積極的に情報を提供している。その主な内容は、以下のとおりである。

〔印刷物の刊行〕

- (1) 「同志社大学法科大学院パンフレット2013」：本法科大学院の特色、新しい教育態勢、人材養成指針、アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、カリキュラム及び開講科目と担当者名、履修モデル、教員紹介、学習環境、奨学金制度の概要、入学試験の概要、学生納付金等が掲載されている。

- (2) 「司法研究科英文パンフレット」
- (3) 「同志社大学大学院案内2013」
- (4) 「同志社大学大学案内2013」
- (5) 「同志社大学基礎データ集2012」
- (6) 「ファクトブック同志社2011」
- (7) 「学校法人同志社事業報告書2011」

〔ウェブサイトへの掲載〕

- (1) 本法科大学院ウェブサイト [<http://law-school.doshisha.ac.jp/index.html>] : 本法科大学院の概要, カリキュラム, 教員紹介, 在学生・司法試験合格者の声, 入試情報, 自己点検・評価報告書等が掲載されている。
- (2) 同志社大学ウェブサイト [<http://www.doshisha.ac.jp/>] : 本法科大学院ウェブサイトのほか, 大学全体のウェブサイトにおいて以下の情報が公開されている。
 - ① 大学院学則, 専門職大学院学則, 法科大学院学則, 大学院一般内規
 [http://www.doshisha.ac.jp/students/curriculum/school_regulation.html]
 - ② 成績評価結果の公表 [<http://duet.doshisha.ac.jp/info/gpaindex.jsp>]
 - ③ 奨学金制度 [<http://www.doshisha.ac.jp/scholarships/guide/guide.html>]
 - ④ 「大学基礎データ集」(沿革, 組織図, 学生数, 入学試験, 学生異動, 修了者数, 奨学金の給付及び貸与状況等)
 [http://www.doshisha.ac.jp/information/overview/basic_data/new.html]

	ウェブサイト	パンフレット	大学院案内
(1) 設置者	○	○	
(2) 教育の理念及び目標	○	○	○
(3) 教育上の基本組織	○	○	○
(4) 教員組織	○		
(5) 収容定員及び在籍者数	○	○	
(6) 入学者選抜	○	○	
(7) 標準修了年限	○	○	○
(8) 教育課程及び教育方法	○	○	○
(9) 成績評価及び課程の修了	○		
(10) 学費及び奨学金等の学生支援制度	○	○	○
(11) 修了者の進路及び活動状況	○	○	○

3. 教員の情報の公開

専任教員については, 担当科目, 略歴, 最近5年間の研究上の業績を含む主要な研究業績, 学外での公的活動や社会貢献活動を本法科大学院ウェブサイトで公表している。兼任教員, 兼任教員についても, 担当科目, 略歴にとどまらず, 主な業績, 社会活動歴, 著書

等をウェブサイトで公表するようにしている。また、本法科大学院のパンフレットにおいても、専任教員，兼任教員，兼任教員の略歴と社会貢献活動を紹介している。

4. 情報の保管

自己又は外部による評価の基礎となる情報は、本法科大学院が調査・蓄積した情報、自己点検・評価委員会に関する文書及び学内外に公表した文書、定期試験問題、答案原本及び成績関連資料等を含めて、本法科大学院が定めた文書保存年限に基づき、司法研究科事務室が適切に保管している。

5. 今後の検討課題

自己点検・評価委員会の作業、その成果の公表及び本法科大学院情報の公表は、制度的にも確立しており、適切に行われている。本法科大学院教員が、雑誌への寄稿を通じて情報発信を行う例もある。今後は、点検・評価結果を受けての組織的な自己改善の過程を一層円滑に働かせることが課題である。